

小説千幻

双紙屋

創刊号

物語百合若/千草はじめ

ソリューション
～手の中のタイムマシン～
/夢幻

光面道(かげとものみち)を治める万(よろず)の王は、冬の京(みやこ)の往来で、自らを擲揄した落書に出会う。財と権勢を誇りながらも妻に先立たれ、子宝にも恵まれぬ万の王と、人望厚く子沢山で知られる朝日の長者を単純に比較した他愛のないものではあったが、却って彼の心を大きく揺さぶった。

万はそれでも表向き落ち着いた様子で、深紫の縫腋袍にとまった虫を軽く払った。

「よい、捨て置け。」

供の子どもが慌てて落書を消そうとしていたので、車から万がそう命じると、彼らも黙って従うしかなく、おずおずと帰り来て「おのれ、無礼な振る舞い。次こそ見つけたら只では済まされぬ。」等と口々に憤った。

「殿下、余りお気になさいまするな、口さがない者は何処にでも居りましょう、上から下まできりがないものです。」と、横から囁くのは岑守(みねもり)なる人物で、宮廷随一の文人として知られる俊英である。そんな二人が、雪こそ降らぬが寒空にこうして連れ立って牛に引かれているのには理由があった。

万の王は岑守の助言に肯くと牛車を進ませた。彼らを急がせる、その訳とは神宿る島国と五人の王を束ねる帝、日の本の天子安殿(あて)が倒れたとの報を受けたからで、壁の落書などにかまけている場合ではないのだ。岑守は、その道中、牛が凍った泥に足を滑らせ骨を折り立ち往生しているところを万の車に救われた。それまで両者はさほど親しくなかったが、袖振り合うも多生の縁とばかりに同道する運びとなった。

天子が崩御したのは、この数日後である。

晩年の安殿から寵愛を受けていた薬子(くすこ)なる高級女官は、本邦仕込みの法術で命を長らえさせようとしたが、八百万の神々が定めし寿命には逆らえず、結局、最大の後ろ盾を憐れも喪った。それでも尚、諦め切れなかった女は、殯(もがり)の宮に休む亡骸のそばへ寄り添い、いつまでもすすり泣いたという。この薬子、齢が四十も半ばを過ぎようとしているにも関わらず、外見は十五前後の、うら若き乙女そのもので、此方も法術による業であった為、法術を怪しむ人々は、一様に薬子を恐れた。

先帝の本葬が済めば、次は新帝の即位の番である。新たな天子に就いたのは、まだあどけなさも残る十九歳の太子、山我(さが)。羚羊の如き峻厳な顔立ちで、見目麗しく、文武に長け、書や詩にも造詣の深い、誰もが認めざるを得ない才覚の持ち主であったが、先帝に比べ、やや人の情に欠けると思われていた為、その辣腕に対し不安を抱く王侯貴族も少なくはなかった。

ともあれ、天子即位式は、高御座頂く大極殿にて厳かにも恙無く執り行われ、天子山我がここに誕生したのである。それから、新帝を祝う絢爛豪華な宴が、大内裏の広場で賑々しく催され、これが三日三晩と続いたが、山我はほとんど衆目に姿をあらわす事なく、早咲きの桜を眺めながら只管黙考していた。

そして、万の王も、体調不良を理由に宴を途中で抜け出し屋敷へ引っ込むと、天子同様、庭の

梅をじっと見詰めながら、物憂げに沈思する。

両者は同様の孤独を選びながら、全く別の思惑から宴を拒んでいた。

この三月の後、京で権勢を誇り、豊かな領国を育んだ万の王は、その地位を返上すると同時に、領地を兄達へ譲り渡し、風の様に政界から去った。無論、周囲は必死に引き留めたが、万は新帝の即位をよい機会と告げ、供も連れずに独りきり、初瀬山(はつせやま)の森深く分け入るや、御神木の杉の前に跪き、八百万の神々に念じ、斯様に言上する。

「財も、地位も、名誉も疾うに捨てました。今、私が唯一つ願わくは、子宝。八百万の神々よ、どうか、我に子をお授け下さい。私にとって、それ以上の宝はありません。日の本に在す尊き神々よ、この願いを聞き届け給え、我に子を抱かせ給え！」

しかし、一度目の願いは聞き届けられるどころか、八百万の神々がまるで、皆、耳が聴こえなくなってしまったかの如く、声も兆しも万に見せはしなかった。そこで、万は「聞き届けられるまで、我はここを動かぬ。」と嘯いてみせ、彼は杉の巨木の前に坐したまま、雨の日も、日照りの時も、一步も動かなくなった。飲むのは雨露か、時折風に吹かれて飛んで来る落葉のみ。やがて、それすらも無視されたと解ると、遂に何も口にせず、只管祈る日々が始まった。

末子にも関わらず先王である父の推挙で日の本の五王の一翼を担い、先帝の右腕ともなった万は、五十を過ぎた今、何もかも捨て、狂った願望のみを懐に、森の中で祈願(いのり)続けた。周囲には、万が衰弱するのを狙う、山犬や鴉が集まり出している。時は、もうそれほど残されてはいないのだ……。

餓死するが先か、鳥獣に食い殺されるが先か、何れにしても、待つは屍。

己の人生とは何だったのか、そんな疑問すら薄れつつあった時、不意に万の脳裡に、ある光景が浮かび上がった。百合の花畑だった。青空のもと、薫風に揺れる白い百合達の中に、人影が佇んでいる。それは忘れようとも忘れられぬ、妻の在りし日の瓊姿……。才あり、天子の信任厚い万でも頭の上がらなかった唯一の女性であった。彼女のほかに万の心底を理解してくれる者はいなかった。彼女の死後、万には子をなす機会は幾らでもあったのに、今、こうして神々に縋るまでそうしなかったのは、彼女の影が己の内から消えなかったからなのだ、と、王位を返上した、裸の万は気付いたのである。

その瞬間、闇に閉ざされていた万の視界が開けた。彼は何とも形容しがたい神妙な輝きに包まれ昂揚感に漂いながら神霊の往来を感じ取ると、輝きの中を行き交う数多の煌きのうちに懐かしい気配を見出す。初め万にも気配の正体が掴めなかったが、まじまじ目を凝らしていれば、相手も此方を振り向いたので、それが懐かしき顔(かんばせ)、我が妻の面影だと解り、互いに安堵の微笑みを交すと、ひとときの間目合(まぐわ)った。

「そうか、そなたであったか。」

万は呟き、静かに瞼を下ろす。肉体が悲鳴を上げ、みるみる衰微してゆくのが分かった。だが、もうよい。この両の腕に、妻と、その間に授かった我が子を抱く夢を見ながら、朽ち果てるのも悪くはない。己が肉体の、土へ還る様を感じながら、痩せ細った万の上体は前のめりに崩れた……………

「ほぎゃあ、ほぎゃあ。」

……………どれほどの時が経ったかも判ぜぬ、夢現の狭間で、命の灯火を消しつつあった万の耳に、嬰兒の泣き声が聴こえる。いや、まだ己は夢の中にいるのかも知れぬ。嬰兒の泣き声は止まない。この声は、夢の中で抱いた我が子の声に似ていなくもない。否、我が子の声そのもの！万は我が子の声を辿るため、光を求めるかの如く、遠ざかる意識を這い上がった。すると、次第に、芳しい花の匂いが、芬芬と立ち込めて来るのがわかった。

「百合か。」

その、甘く淀みの無い香気は、紛れもなく百合の花であった。万は百合畑を掻き分け、泣き声の方へと這い進む。百合の花の香りと共に水気を含んだ土の臭いが鼻を衝く。昨日降った雨で地面が湿っていて、土の湿りがぴちゃぴちゃと音を立てる、水音と、泣き声が混ざる。

「どこじゃ、どこじゃ……。」

万は這い這い泣き声へと近づいて行く。その間に、視界がはっきりして来たかと思うと、生まれたての匂いのような気配を感じた。足元を見下ろせば……白い絹衣に包まれた嬰兒が泣いているではないか。

その嬰兒は大きく、すでに一才の子程度のふくよかで立派な男の赤ん坊だった。

「おお、そなたは、何処(いずこ)から参ったのだ……捨てられたのか、それとも、親を亡くしてしまったのか？」

しかし、そのどちらでもない事を万は悟る。嬰兒を包んでいる衣に見覚えがあり、それが、亡き妻の身に着けていたものだ気付いた……いや、そう確信したからである。

あの夢は夢でなはなかったか。と万は思いながら、彼は嬰兒を抱いた。すると、今まで泣きわめいていた嬰兒が、途端に泣きやみ、そして、きゃっきゃと爆ぜる様に笑みを輝かせ始めた。その笑顔を見せつけられた万の肉体は、疲弊から一気に解放される。子に縁のなかった老いたる男が、忽然と現れた赤子の父親となった瞬間であった。

「はて、そなたを何と呼ぼうか……。」

赤子を抱いた万が、そう呟きながら辺りを見渡せば、自らが百合の花に囲まれている事を改めて教えられる。

「……そうだ、そなたは百合……百合若(ゆりわか)と呼ぼう。」

きゃっきゃ。

また笑顔が爆ぜた。

「よしよし、気に入ったか、百合若よ、そなたは私の息子じゃ。」

抱きあげた百合若を、木漏れ日が照らす。万はこの男児が八百万の神々から祝福されているの

だと感じ、更に愛おしくなった。

だが、父子を待ち受けていた現実は苦難から始まった。私財を擲ち、身一つとなった万は雨露をしのぐ場所に迷い、食うにも困る乞食であった。しかし、身を助く芸もなければ、業も持ち合わせてはいない。ただ往来を行き交う人々から椀一杯の残飯を恵んでもらうのが精一杯だった。万は何もかも捨てた事を後悔しそうになった時、百合若の寝顔を見つめた。不思議な事に、百合若は少しの食糧ですくすくと育っていた。与えられれば幾らでも食べられるのだが、食わずとも育つのだ。というのも、初瀬山を下りたばかりの頃、百合若に飲まず乳を分けて貰おうと、京のはずれに住む子沢山の一家の女に頼むと、女は快く受け入れた。ところが、いざ乳を吸う段となった百合若がこれを拒み、結局飲まなかった為、困り果てながら幾日もその女の宅で乳を吸わせようと努力を重ねたものの、徒労に終わった。ああ、折角授かった申し子も、このままでは亡くしてしまう、と万は諦めていたのだが、百合若の方は何日も飲まず食わずの癖に、いつまで経ってもぴんぴんしている。その内、女の家を厄介になっていた万の方も、逗留生活の挙句、飯にありつけたお陰で元気になってしまった。万はこのまま居着いてしまっただけは迷惑がかかると思い、赤子を連れ、女の宅を辞した。

また、女の宅を辞してから暫くは何も恵んでもらえず、万が弱っていると、今度は薄汚れて殆ど色も解らなかつた万の深紫の衣に気が付いた近隣の翁が、貴人であろうと察し、彼を見かねて畑の作物を毎日くれる様になった。すると、翁に釣られて方方から肉や作物が届けられ、次第に、万一人では食べきれない量となり、試しに息子へ与えてみれば、百合若にはとっくに歯が生え揃っていて、それらをぺろりと平らげてしまったのである。これらの出来事から、万は我が子百合若がやはり只者でないと感じると同時に、すぐにでも立派な若者に育ってくれるであろうと言う、希望と活力が湧いたのであった。

しかし、幸福の後には必ず苦難がつきものである。

ある日、万が他の乞食らと共に往来でお恵みを求めていると、かつて朝廷に仕えていた頃、交際のあった公達が数人の供を連れ歩いて来たので、万は思わず身を隠そうとした、ところが、折悪しく、反対側から「おや」と声が聴こえ、はっと顔を上げれば、誰であろう岑守が立っていた。だが、岑守自身は、万の零落した姿をすぐに察し、その場を立ち去ろうとしたのであるが、その岑守を、向かいから例の公達が捕まえ、立ち話を始めてしまったのである。さらに公達は乞食たちを塵でもあしらうかの如く、供の剛力に掃けさせ、老いさらばえた者も、不具の者も、剛力の足蹴に地を舐めさせられる。万も一人逃げるわけにゆかず、幼い子を庇って剛力に踏まれ、背中を傷めた。

「……このような薄汚い場所では難です、どうか、あちらの木陰で。」

乞食たちに対する無慈悲な振る舞いに耐えきれなくなつた岑守は、何とか話題を逸らす事に成功し、万を気にかけて、公達と共に往来から姿を消した。

あとに残された万は、痛めつけられた乞食仲間たちを労わり、慰め合いながら、弱った体に鞭打ち、ようやく棲み処の橋下まで辿り着くと、すやすやと眠る我が子を抱き、涙した。そして、ここは、京はもはや自分の居場所はないと悟り、傷の癒えた頃、天朝頂く世界を背に、再び山を

目指したのであった。

新たな罅は洞穴だった。そこで火を熾し、物乞いをしていた頃に拾った土鍋に摘んで来た山菜や拾った木の実を、澄んだ川の水で煮炊きするのだが、生憎、秋の暮の山は疾うに鳥獣に掘り尽くされ寒々しく、膳の彩には恵まれなかった。だが、万は、京で侮蔑の煮え湯を飲まされるよりはましだと考え、味も素気もない只の水煮を甘んじて食した。

しかし、山生活に慣れぬ男の思慮の甘さは、別の場面で露呈してしまう羽目となる……。何時もの様に川の水を汲み、罅へ戻って来た万を待ち受けていた者は山犬であった。それも一頭や二頭ではない、両手で数えて余りが出る頭数だろう群れである。奥には我が子が寝ている。このままでは貪り食われ、山犬共の胃袋に収まるのは必定である。

「百合若……っ！」

万は狼狽の余り鍋を落とし、慌てて手に取った木の枝を振るうが、逆に山犬どもに吠えたてられ、木の陰に撤退する。だが取敢えず、百合若から気を逸らすのには成功した模様で、山犬たちは唸り声をあげながらじわじわと万を囲み始めた。今度は、万が狩りの対象になったのだ。万は忘れていた。初瀬山の森で自分をつけ狙っていた獣たちの気配を感じたあの感覚が、京の往来での物乞い暮らしの中で、すっかり鈍麻してしまっていた事に、今この時気が付いたのだった。

もはやこれまで、と万が覚悟を決め、項垂れた瞬間、突如、コーン！と音を立てて幹に何か突き刺さった！

その音に驚いたか、山犬の群れは、一瞬たじろぎ、怯えを見せる。

「やっ？」

万が目を凝らせば、それは矢であった。何れからか飛来した矢が木を穿ち、山犬の群れに動揺を与えたのだ、それから続いて「おお！」と、狼の吠え声の如くけたたましい雄叫びと共に、山の様に大きな男が現れたかと思うと、逃げ遅れた一頭の山犬を持ち上げ、地面へ叩きつけた。犬は悲鳴にも似た啼き声をあげ、足を滑らせながら仲間を追って散り散りに森へと逃げ込んで行く。万は何事か理解に苦しんだが、ともあれ、獣に食われる危険が一先ず去った事に安堵の念を覚えざるを得なかった。そして、胸を撫で下ろすと共に不安に駆りたてられ、慌てて洞穴を除けば、百合若は何事もなかったかとの如く、穏やかな寝息を立てながら眠っていたので、我が子の無事に腰を抜かして膝を落とした。

そんな万の姿を見た山男は「情けない男だ。」と呆れたが、彼は万を介抱しながら山の中腹に設けた掘立小屋まで、父子を連れて行った。

掘立小屋には、生まれたばかりの赤子と、その母親らしき女が寝ている。

山犬から万と百合若を救った山男は門脇(かどわき)と名乗った。

「ぬしを暫くの間、遠巻きに眺めておった。恐らく冬には寒さで凍えようから、その時には声を掛けようと思うてな。だが、その前に、山犬がぬしの甘さを教えてくれたようじゃ。感謝するのだな。儂にではなく、山犬どもに。」

門脇は、火にかけた竈へ薪を焼べながら背中越しに語る。万には返す言葉もなく、ただ萎れた四肢を壁に預け、この山暮らしに長じた男の説教を受け入れるのみであった。

その冬に、門脇の妻は肺を患い、幼い娘を残して世を去った。生前、門脇の妻は、居候の身

となった万が京の貴人であるを見抜いていたのか、頻りに娘の名付け親になって欲しいとせがんでいたが、万は身に余ると辞退し続けていた。

「しかし、こうなってみれば、私も無下にするべきではなかった。」

万の後悔は門脇の娘へと注がれ、彼は己の『万』から一字を与え、幸多き人生を歩んで貰おうとの思いを込め、万寿(まんじゅ)と名付けた。

百合若と万寿は殆ど同じ年であった。両人はその後、家族として万と門脇の間で大切に育てられてゆく、運命の日を迎えるまで……。

後篇

へつづく

*Profile

千草はじめ（ちぐさ - ）

小説から漫画原作まで、多岐にわたった創作活動を行う、電子書籍作家。

現在、『物語百合若』のほかに、E☆エブリスタでも小説『[新世界ブルー](#)』を連載中。

*あとがき

物語百合若は、幸若舞などで有名な民話『百合若大臣』を材に取り、組み立て直したオリジナルファンタジー小説です。

第一話となる今回と次回後篇は、長編小説となる予定の本作の序章となっております。主人公の百合若と、その父である万の王の数奇な運命はまだ回り始めたばかりです。この先、百合若に何が待ち受けているのか、原作の民話と同じ展開にはしないつもりですので、乞うご期待下さい。

都心から車を使って二時間、三方を山に囲まれ、残る一方を海に面している街、枉津市。早くから鉄道や高速道路が通ったこともあって、かつては観光地としてののにぎわいもあった。しかし、それも過去のこと、昔は毎年のように誰かが家を新築していたが、今では古めかしい家が並ぶばかり、新車がひしめいていた道路は子どもの遊び場に、ホテルが満室だったのは在りし日の思い出。

なにもない退屈な町で、市立高校の入学式が行われたのは数週間前のことだった。他の建物同様建てられてから年月は経ているが、敷地は広く建物も豪華で、相当な額の建築費が掛けられたことは想像に難くない。入学式の時に咲き誇り、新入生たちを歓迎してくれた桜も今では僅かに花びらを残すばかりだった。

風楽 統也（ふうら とうや）、このメガネをかけたどこにでもいるような男子高生は、校舎の屋上から桜を見下ろしながら仲間を待っていた。高校に入って早々に、同好会に映画研究会があるということを知り一も二もなく入会。この町には映画好きの人間が少ない。それというのも、映画館がない——統也が生まれるより前に潰れてしまった——からだ。

予算のもらえない同好会でも映画好きな仲間と一緒に、ノートパソコン持参で仲間と持ち寄ったDVDを観るのが放課後一番の楽しみになっていた。

「まったくあの子ときたら！」

もうじき三十になる女教師、鬼島 久美（きじま くみ）は職員室に戻るなり悪態を吐いた。今ではすっかり古くなっている校舎だが、広さと設備に関しては他校を圧倒するものがあった。

「まあまあ、そうカリカリせずとも」

それを見てたしなめたのは、地頭 幸治（じがしら こうじ）五十六歳。すっかり寂しくなった頭のせいで長老と影で呼ばれているが、年の功で生徒に対して理解があるため人気は高い。

「よくそう言っていますね、そもそもあの子に最初に反対したのは地頭先生じゃないですか！」

地頭に噛み付いた久美を見て、様子を伺っていた南海 鷹士（みなみ たかし）も話に加わろうとやってきた。

「そこのところは私も聞きたいですね」

歳は四十五だが、外見には気を使っているため見栄えはいい。写真になると人気が高いが、実物はタバコと整髪料が混ざった臭いを放ちながら、人が話していると気取った態度で割り込んでくるため、彼自身が思っているような人気はない。今も、整髪料がベッタリとした髪をかき上げる様を見せ付けるようにしている。

「そもそも地頭先生は新聞部を作ることに反対していたわけですが、どうしてそんなに新聞部を目の敵にするんです？」

「なぜって、昔からそうですからね」

地頭の答えは簡潔だった。この学校では学内新聞は教師が作っていて、時折生徒が主体の新聞部を作るという声が出るが、新聞部ができたという場面は久美も鷹士も見たことがなかった。かつて存在していた新聞部は部員不足で廃部になった時から部室だけが今も残り、その鍵は職員室にかけられている。

「でも、あの子は新聞同好会なんてものを勝手に作っちゃったんですよ、注意したら『同好会の設立を制限する校則はありませんから』って啖呵切る有様なんですよ！」

「それは確かに困ったものですが……」

地頭は言葉に詰まった。確かに校則はそのようになっているが、何かと設備が必要な新聞部を、校内の設備を自由には使えない同好会でやるというのは前代未聞だった。

「でも、鬼島先生はなんでそう、その生徒の……名前なんでしたっけ？」

南海が問いかけた。

「古川です、古川 瑠衣（こがわ るい）」

名前を言うのも嫌だと、久美は顔を歪めていた。

「その古川という生徒になんでそうムキになるんですか？」

「私、ああいう生意気な子大っ嫌いなんでっ！」

こういう気の短さと幼さがなければという声は結構多い。

「若いうちはああいうものなんだ」

それに比べて、地頭はどこまでも気が長い、それが一層久美を苛立たせていた。

「地頭先生がそんなだからあの子が調子に乗るんです！ 聞けば同好会の顧問になったっていうじゃないですか！ 同好会に顧問がいるなんて全体未聞ですよ！」

久美の発した大声は職員室中に聞こえたが、他の教師たちはやれやれまた癩癩を起こしたかという程度にしか思わず、話に入ろうともしなかった。

「それは私も同意見ですね、そんなに甘い顔をしてばかりで、もし問題でも起こしたらどうするんですか？」

南海は、久美の尻馬に乗って地頭を追い詰めたつもりでいたが、地頭はニコリと笑って言い返した。

「だから、私が顧問になって問題を起こさないよう見張るんですよ。あの子は私の教師生活最後の問題児になりそうですから」

久美も南海も言い返す言葉がなかった。久美は南海が余計なことを言ったことに腹を立てたが、南海はというと自分のしたことをまるで理解していなかった。

同じ頃、統也はようやくやってきた二人と話をしていた。

二人共映研の仲間で、祖父の代からの映画好きだと自負している三年の佐武と、二年で映画より女優好きな三廻。それに統也を加えた三名が英研の全メンバーだった。映研に入っているくらいだから、できれば映画を撮りたいという思いは皆共通している、しかし、正規の部であっても部費の少なさに泣かされているような学校では、弱小同好会が部に昇格など考えられるようなものではなかった。

「そーいや統也って、あの瑠衣って子と友達なのか？」

映画の話題に紛れて佐武が言う。

「友達っていうか、まあ小学校からの付き合いですけど……」

統也はちょっと口ごもりながら答えた。

「俺の友達が見かけて一目惚れしたって言ってるんだけど、なんかいい方法ないかな？」

「いい方法って……」

「だから、告白するのにいい方法。相談されちゃってさ」

「そんなの僕にも分かりませんよ。瑠衣さんは見た目で判断しちゃいけないタイプですから」

「どういうこと？」

三廻も話に絡む。

「好奇心と行動力の塊みたいな人だから。この学校に入った時も、新聞部がないなら作ってやるって言い出して、作れないとなったら同好会でやるって作っちゃったくらいだし」

「新聞部を……それはすごいな、うちの学校じゃ校内新聞とかは教師が作るもので、生徒は関わっちゃいけないみたいになってるのに」

「でもそれってなんでですかね？」

「なんでも昔事故だか事件だかがあったんだって、うちの生徒が行方不明になったとか、噂だけだな」

平和に育った統也たちにはピンと来ない話だった。言っている佐武もただの作り話としか思っていない様子だった。

「ホントのところは不明ですか」

ちょっとがっかりした態度で三廻が言う。

「案外、瑠衣さんみたいなのがいて問題になったからだったりして」

「私がどうしたって？」

軽口を叩いたばかりの統也は、背後から聞こえた声に身を固くした。その声には確かに聞き覚えがある。

固まった首を何とか振り返らせると、長い髪を風に靡かせた少女がいた。全体的にまとまっているせいで小柄に見えるが、背丈が低いわけではない。ぱっちりとした大きな目をし、雑誌から抜け出てきたようなものとも違う独特の健康的な美しさを持っていた。

その美しさは佐武と三廻の心を奪い固まらせ、特に統也は氷のようになっていた。

「る、るいさん……」

統也の声は、ほとんど声になっていなかった。

「あら統也君、こんな所にいたんだ、偶然ね」

わざとらしい態度を取りながら、瑠衣はその手で統也の肩を掴んだ。その手は柔らかく、ほんの少し冷たい。

「で、私のこと、何か言っていたのかな？」

統也の肩に瑠衣の手が食い込む。その握力は少女にしてはかなり力強い。

「い、いえ、なにも……」

「そう、ならいいけど」

瑠衣は手を離し、菩薩のような笑顔を浮かべた。

「ところで私困ったことがあるんだけど、助けてくれないかな？」

何も知らない佐武と三廻はただただ瑠衣に見入っているが、古い付き合いの統也は瑠衣の菩薩顔の背後になにかがあるのかをよく知っていた。特に今は、瑠衣の悪口とも取れるような事を言った直後だけに慎重な対応が求められた。

「な、なんでしょうが……」

「私が新聞同好会作ったのは知ってるでしょ。でもこの街ってすごく平和で謎も怪奇も神秘もミステリーもなにもないのよ、なにかいいネタ知らない？」

「ぼ、僕はそういうのはなにも――」

「じゃ、探してきて」

知らないと言おうとした統也の言葉を遮って、瑠衣は有無を言わせない強い口調で言いつけた。

「は、はい……」

「ありがと」

瑠衣はニッコリと微笑んでから統也から半歩距離をとる。次の瞬間、瑠衣の足は丈の短いスカートを気にすることもなく、綺麗な半月状の軌跡を描きながら振り上げられ、統也の鼻先をかすめつつメガネを空高く弾き飛ばした。

「あまり影で人のことを言わないようにね」

瑠衣が笑顔を見せてから統也のメガネが飛ぶまで一瞬の出来事だった。瑠衣の姿がなくなっただけから、足元に落ちてきたメガネを拾おうとした統也が手を開くと、そこにはべっとりとした汗が吹き出していた。

「見た目判断しちゃいけないって、よーく分かった……」

メガネを取りに向かった統也の背を見ながら、同じように固まっていた佐武が呟くと、三廻もそれに頷いた。

「大丈夫？」

戻った統也に三廻が問う。

「い、一応……本気で怒らせさえしなければ大丈夫だから……」

「もし、怒らせたら……？」

「もう半歩前からあの蹴りを喰らうことになりますね」

統也は青い顔をして答えた。そんな距離から蹴り上げられるところといえば一つしかない。

「す、すごい性格だな……」

「あ、あんなの序の口ですよ……昔からなにかと首を突っ込みたがる性格だったから……」

それでも、昔は好き勝手に飛び回っていたのに、今になって新聞部というものにこだわるのは妙な気もしたが、今はそれを考えるよりも瑠衣に言われたことをこなさなければと、二人に断って席を立った統也を見送って佐武がつぶやく。

「かわいそうな気もするけど、あれだけ可愛い子と仲がいいのは羨ましい気もするな」

「それにしても、こんな町に新聞になるようなネタがあるんですかね……？」

「それは……ないかもな……」

「そうだった時、統也がどんな目に遭わされるのかを考えると……」

さっき見た瑠衣の蹴りを思い出して二人は身震いした。

「慰めになるような映画でも探しといてやるか」

三廻も頷き、二人も屋上を後にした。

統也は夕暮れまで探しまわったが、聞いた話の中にこれという目ぼしいものは何一つとしてなかった。

翌朝、冠城 美冬（かぶらぎ みふゆ）は、通学中にクラスメートの瑠衣の姿を見つけて走り寄った。陸上部にいただけあって、鍛えられ引き締まった脚をしており、僅かな距離を駆けるだけでも軽やかな走りを見せた。

「おはよう瑠衣。陸上部に入るってこと考えてくれた？」

美冬は、瑠衣の脚力を知ってから毎日のように瑠衣を陸上部に誘っていた。

「おはよう、せっかく誘ってもらって悪いけど、私そういうの興味がないの。それより新聞同好会をちゃんとした部にしたいし、ごめんなさいね」

誘われた時からキッパリと断っていたが、美冬は一向に諦めようとはしなかった。

「そんな、もったいないよ。せっかく百メートルを十二秒台で走れる足があるのに」

走ることに限らず、瑠衣は運動全般について自信があった。もっともそれを今言うとは余計に話がややこしくなりそうなので言わない。

「トレーニング無しでそれなんでしょう、鍛えれば十秒台も夢じゃないかもよ、もしかしたらオリンピックにだっていけるかも」

美冬は目を輝かせていたが、十秒台やオリンピックを夢見ているのは他でもない美冬自身なのだろう。

「私には荷が重そう。それより美冬が将来オリンピックに出たら応援に行くから」

程なくして予鈴がなり、二人は競い合うようにして並んで走った。美冬は、さすがに陸上部にいただけあって、綺麗に整ったフォームで大地を駆けた。一方で、瑠衣の走りも拙いながら、速力では美冬に引けをとっていない。美冬は、これでちゃんとした走り方を身に付けてくれればと、心の底から惜しんだ。

学校に着いて一人になると、瑠衣は授業もそっこのけで新聞同好会の事を考えていた。問題は
どうやったら部に昇格できるだけの部員を集められるかだが、そもそもこの学校には新聞部をや
りたがる生徒がいない、そういう人間に新聞同好会の存在をアピール出来るだけの話題があれば
いいが、それが無い。

教壇に立っている教師は、授業時間もそろそろ終わるので本題を止めて雑談をしている。

「こうして中国を統一した秦の始皇帝の死とともに、秦の支配も弱まってまた戦乱が起きるわけ
だが、そうなることを知っているとか見抜いていた人はいるわけだな。始皇帝が死ぬ前年に
落ちてきた隕石に“始皇帝死して天下が分かれたる”と書いた人がいた。結局誰が書いたかは分から
ないままだが、この言葉の通り始皇帝の死後中国は項羽と劉邦が真っ二つに分って戦うわけだ。
始皇帝が活着しているうちから未来をここまで予見していた人がいたなら、これを書いたのはそう
とうの人物かもしれないな。と、そろそろ時間だし、今日はこれまで」

教師がそう言って出て行くと、皆はようやく終わったと開放感に浸った。

「今の話どう思う？」

勉強好きというわけではないが、話好きな生徒にとってこういう話題は実にありがたいものが
あり、早速周りの仲間に話を振る者がいた。

「つくり話じゃないのか、後になって歴史書を作る時に書き加えたんだろ」

「つまんない考えただな、もっと夢をもてよ予知能力とかさ。超能力なら科学の発達してない昔
のほうがあったかも」

「宇宙人からのメッセージじゃないか、こういう時のお約束だろ」

話に乗る者は思い思いに勝手なことを口にする。話題の内容はそれぞれ違っても、だいたい放
課後というのはこういう開放的な空気があるなかで、瑠衣は一人頭を抱えていた。

「どうするのよこんなので……部員はいない、ネタはない」

傍目から見れば、こうして悩む瑠衣の姿は物憂いを抱えた美少女であり、見るものの心を引き
付けるところがあった。だが、すでに瑠衣目当てで新聞同好会に近づいた者は、例外なく瑠衣の
悪魔の部分を見せ付けられ這々の体で逃げ出していた。

瑠衣も黙ってネタを手招きしていたわけではなく、あちこちを歩き回っては記事になりそうな
ことを探した、だが取材してきた内容を見ると、眉をひそめるしかなかった。

枉津市は、平穩そのもので大事件といえるようなものは珍しい。それどころか、小さな事件に
事欠く有様だった。現に、瑠衣が集めたニュースというのは、木に登って降りられなくなった猫
が多発しているとか、台所からバナナが消えたという小さなもので、大きなものでも数ヶ月前に
出来たばかりなのに人が寄り付かず職員が次々辞めていく公民館と、とてもではないが瑠衣の好
奇心を刺激してくれるようなものではなかった。

「こうなったら統也だけが頼りか……」

「呼びました？」

振り向くとそこには悩みのない顔をした統也が立っていた。

「待ってたよ統也くん、それで何か良いネタはあった？」

期待を込めた目で統也を見る。

「いえ、なにも」

統也は、まったく悪気のない様子で答えた。

瑠衣は間髪入れずに、自分が聞いてきた噂話のレポートの束で、目の前にいる呑気な顔をした統也を叩きつけた。

黙っていれば天使でも、生まれつきの癩癪持ちの気質だけはどうにもならなかった。

「す、すみません……っていうか僕は映研の人間なのに、なんで新聞のネタ探しを……」

「いいじゃない、友達でしょ。何度も助けてあげたじゃない、宿題忘れた時とか、カツアゲされた時とか、学校帰りにおもらした時とか」

「も、もういいです！ 分かりましたから！」

このまま言わせておけばどんなことを言われるか分からない。統也は慌てて瑠衣を止めた。すでに数人の耳には届いていて声を殺して笑っているものもいた。

「あーあ、いっその町滅ばないかな」

「な、なに物騒なこと言ってるんですか」

「ちょっとした乙女の祈りじゃない、いいでしょこれくらい！」

「いいわけないですよ、そんなこと言っちゃって、もしほんとうになったりしたらどうするんですか」

「なるわけないでしょ、祈るくらいで実現するなら誰も困ることなんてなくなるじゃない」

「それが分かってるなら祈らないでくださいよ。そんな気持ちで祈ったらそれこそバチが当たるんじゃない……」

瑠衣は統也の言葉を聞き流しながら机に向かい、手元にある取材結果から公民館のことを書いた紙を拾い上げた。

「これ、取材に行こうか。公民館では職員が次々辞めていくという噂、この中ではまだマシだし、ちょっとは不思議だし、ね」

そう言って笑いかける瑠衣は、悪魔を背中に背負った天使の顔をしていた。

「は、はい」

統也は、二つ返事でうなずき、うなずいてから気になっていることを口にした。

「先生に許可とか貰わなくていいんですか？」

「いいのいいの、一応顧問付いてるけどさ、職員室行くと久美ちゃんがうるさいんだよね。ま、同好会だし、いいでしょ」

「顧問って……同好会なのになんで……それに久美ちゃんって……担任の先生なのに」

「さ、行きましょうか」

瑠衣は例によって、有無を言わせない笑顔で答えた。これ以上口答えすると命にかかわるという予感が統也の全身を貫いた。

春の日差しを浴びて、じんわり熱持っているアスファルトの上を二人は並んで歩いた。

「ところで、なんで噂話の取材なんてするんですか？」

「そうでもしなきゃ事件なんてないでしょ」

「でも、学級新聞なんだから、他の部を取材するとか、先生達の言葉を載せるとかでいいんじゃない」

「そんなものは部費がもらえるようになったら適当にやればいいの」

「部費……もしかして、そのために新聞同好会作ったんですか？」

「決まってるでしょ、新聞部ならどこに行ったって“取材”って言い張れるんだから、遊びまわるのにこれほど向いた部なんてないでしょ」

「なんとまあ……」

統也は呆れつつも感心した。

「見てなさいよ、絶対に実績を作って同好会から部になってやるんだから！」

「それなら部員を集めたほうが早いんじゃない……瑠衣さんが黙っていれば人が来ますよ、絶対に」

「分かってないなあ、そんなのが来たって面倒くさいだけの無気力部員が揃うだけじゃない。ちゃんとやる気のある部員を集めないと、私が好きなことやってられないでしょ」

「そ、そうですか」

「楽をしようと思ったら苦労するしかないのよ」

瑠衣がさらっと言った言葉に、統也は二の句が継げなかった。

目当ての公民館に着いた二人が扉を開けた瞬間、なんとも嫌な臭気が中から溢れ出てきた。

「な、なにこの臭い、なんか腐ったみたいなの……」

「嫌な臭いですね、建物が新しいせいかな」

「いくら新しいっていったって出来てからもう三ヶ月は経ってるでしょ、それにこの臭い、新築の臭いって言うよりは、なにかが腐ったみたいなの……嗅いでると頭痛くなりそうよ」

「でも……現にこうして臭いが……これじゃ人が寄り付かないのも当たり前ですよ……」

「と言うことは……噂は真実だった……ああっ！」

瑠衣は愕然となった。それもそのはず、瑠衣が聞いた噂というのは『公民館に人が寄り付かない』と『公民館の職員が次々辞めていく』というものなのだ。こんな嫌な臭いが立ち込めていれば居たくないのも当然だ。

「は、始まったはずの調査が終わってしまった……」

「それにしてもひどい臭いですね、下水管に穴でも開いてるんでしょうか」

一応は調べておこうということで、二人は公民館に残っている職員を探しにいった。

事務室にいった二人が見たのは、かなり広い空間に数人の職員しかいないという、なんとも異様な光景だった。

瑠衣が話を聞きたいというと、対応した職員はここでは何だからと外へ連れて行った。

公民館から出ると空気が非常に美味しかった。久々に空気の有り難みを実感した。あの建物は気密性が高いため、臭いが籠るのだと職員は教えてくれた。

「よくあんなところで仕事できますね」

「他に行く場所もないしね、家族持ちは辛いよ」

おそらくは三十半ばであろう職員は苦笑いを浮かべてそう言った。

「なんであんな臭いがするんですか？」

「うーん、それは僕にもなんとも……みんな色々言ってるけどね、業者の陰謀説とか、新建材説、お墓を壊したあたりとか、中には花子さんの呪いなんてのも」

「お墓って、ここは元……なんだっけ……」

瑠衣は言いかけた言葉が出てこないの、記憶の糸を辿ろうとして言葉に詰まらせた。

「マンションでしたよ、ただ、その頃から人っ気はなかったような」

昔を思い出せないでいる瑠衣に、統也が助け舟を出した。

「うん、でもその前はお墓だったんだって、僕が子どもの頃の話なんでよく知らないけど、辞めちゃった職員の方がそう言ってたよ」

「業者の陰謀というのは？」

「こんな公民館を建てたって使いものにならないから、壊してまた建てるってなったらお金になるでしょ、それを狙ったんじゃないかって、僕達が勝手に言ってるだけだけど、ここを建てた綿貫建設って業者はあんまり評判が良くなくてね、ばあちゃんの若い頃から何度も問題起こしてたって聞いたよ」

「ほんとにそうだったらひどい話ですね。それじゃ花子さんの呪いというのは？」

「トイレが一番ひどい臭いがするからそう言ってるんだ。だからみんなしたくなったら近くのコ

コンビニに借りに行ってるんだよ。僕は知らないけど、特に女子トイレが酷いんだって」

それを聞いた瑠衣の耳がピンと跳ねる。それを見た統也は身を一步引いた。瑠衣の耳がこうして動くのは、瑠衣の好奇心が刺激された証拠だ。一度こうなるともう止まらない。巻き込まれる前に逃げようとした統也を捕まえ、引っ張るようにして女子トイレに向かう。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ、そこ女子トイレじゃないですか。まずいですよ」

必死の抵抗を試みるが、瑠衣の腕力と脚力の前には手も足もでなかった。

「入って見たかった所でしょ？」

「な、なに言ってるんですか、そんなことあるわけないでしょ！」

統也はあたふたとしながら答えた。

「さっきの話聞いてたでしょ、誰も使ってないトイレに遠慮しなくていいの」

「無理ですって！」

結局、統也はトイレの前で待ち、瑠衣一人でトイレに入ることになった。

「なにこの臭い……」

中に入った瑠衣を待ち受けていたのは、悪臭という言葉さえ生ぬるいほどの嫌な臭いがこもった空間だった。壁に取り付けられた換気扇は動いているが、さほど効果があるとは思えない。

ポケットから取り出したハンカチで口と鼻に当てて進む。臭いに反して中はキレイなものだった。真新しく、殆ど使われていないせいだろう。

(こんなところじゃ入りたくないのも当然よね……)

何処かに臭いの元があるはずだと思いながら中を進む。広いな空間でもないのに、一步一步がひどく重かった。それでも気力を振り絞って進んでいく。

だが、そんな瑠衣の覚悟とは裏腹に、奥に進めば進むほど、少しずつではあるが臭いが薄まっていった。

確かに換気扇は動いているが、それだけとは思えないほど臭いに差があった。とりわけ入った直後の臭いが著しく酷かった。

入り口そばにある何か……瑠衣が目をつけたのは手洗い用の水道だった。

瑠衣は手洗いの前を素通りしてトイレを出て、統也に向かって笑顔で言った。

「お願い、一緒に来て」

「は、はい……って、だからダメですよ！」

「そんなこと言わないで」

「マズイですって、男の僕がそんな所入ったらなんて言われるか」

「どうせ誰もこないわよ、だから、ね」

いくら言っても渋る統也をなだめすかして、扉を開け放しておくからということで中へ連れ込んだ。

「ここが原因だって言うんですか……」

喋った途端統也は顔をしかめてハンカチを取り出し、鼻に当てた。

「絶対に臭いはそこからよ、たぶん、水道管が割れるか何かして下水の臭いが上がってきてるんだと思う」

試しに水道をひねってみるとちゃんと水が出た。瑠衣は恐る恐る鼻を近づけてみたが、水の匂いは清涼そのものだった。

「やっぱり排水管よね」

「それじゃ、下を開いてみましようか」

統也は屈んで流しの下戸に手をかけたが、触れた瞬間統也は何か弾かれたように手を引っ込めた。

「なにしてるのよ？」

瑠衣が怪訝な顔をして統也を見る。

「な、なんだか嫌な予感がしたというか……」

「なに言ってるの」

呆れながら瑠衣が戸に手を伸ばす。すると手が伸びるにつれて、瑠衣は全身の産毛が総毛立つのを感じた。

「な、なにこれ……」

統也も同じ感覚だったのだと理解する。

「す、するでしょ、嫌な予感……」

「それって、何かあるならここってことよね……」

統也もそれには賛成して頷いた。

「じゃあ、いくわよ……」

瑠衣は全身を貫く悪寒に耐えながら手を伸ばした。

取っ手に触れていると体に震えまで走った。腕を引こうとしても、本能は明らかにそれを拒否していた。

「な、なに固まってるんですか……」

「だ、だって……やっぱり開けないほうがいいんじゃないかなって思えて……」

このまま帰ろうかな。瑠衣はそんな弱気になっていた。だが戸の向こうにいた運命はそんな弱気を許さず、自分のほうから扉を開けた。

「え……」

取っ手に触れている瑠衣の意志と無関係に、中から押し出されるようにして戸が開く。その奥からは、大量の黒い塊が湧き出すように出てきた。

「な、なによこれ！」

「こっ、これって！」

ネズミだ。そう確認できた時には、辺り一面にネズミがひしめいていた。

子どもの頃に読んでもらった、ハメルンの笛吹き挿絵描かれていたのよりもっともっと多くのネズミだった。

どこでどうやったのか、大量のネズミの中には死骸になっているものがいた。押し合いへし合いされながら押し進んでくるため、死んでいても止まらないのだ。

瑠衣の目にはネズミが湧き出してくる穴が見えた。そして、それを最後に瑠衣の意識は途絶え、深い闇の中へ落下していった。

トレーニングを終えた美冬は、体にまとわりついた汗と砂埃を落とそうとシャワールームにいた。作りは古いが、各運動部ごとに豪華な部室があり、全室シャワーを備えている。

「これで部費があればなあ」

ぼやきながらシャワーの栓をひねるとお湯が飛び出し、日焼けした肌に弾かれた。

古いことは古いだが、当時としてはかなり良い物をつけているおかげで今でも使えている。陸上部に限ったことではなく、ほぼすべての部がそのような有り様だった。いや、学校の外はおろか、町全体がそうなのだ。ある時を境に、この町の成長は止まった。

美冬がふと気がつくと、足元にうっすらとお湯が張っていた。排水口から流れていかないのだ。

「なにこれ、詰まったのかな？」

どうしたものかと考えながら排水口を覗いてみるが、真っ暗で何も見えない。

「参っちゃったなあ」

先生を呼びに行こうとして顔を離すと、引っ張られるようにして排水口の蓋が盛り上がってきた。

「えっ？」

盛り上がった蓋がはじけ飛び、美冬の肌に当たり、数滴の血が水たまりの中に滴り落ちた。

ぽっかり口を開けた排水口から現れたのは、ドス黒いネズミだった。美冬が驚きの声を上げる間もなく、ネズミは異臭とともに次から次へと現れ、美冬の足にしがみついて牙を突き立てた。

「痛っ！」

慌てて振り払うが、しっかり牙を突き立てていて離れないのがいた。

「ちょっと、噛まないでよ！」

お前たちの餌にするために鍛えたわけじゃないと怒鳴りつけるが、ネズミが美冬言葉に耳を貸すはずもなく、足の肉を食いちぎった。

身を引き裂かれる痛みは言葉にならず、美冬は尻餅をついて顔を歪める。齧られたところからは真っ赤な肉が見えたが、そこにもすぐにネズミが群がって見えなくなった。

「やめてっ、いやっ、誰か助けてっ！」

美冬の声に応える者もなく、走ることが何より好きな少女は二度と走れなくなった。出しっ放しのシャワーの水は真っ赤に染まり、部屋中をネズミが埋め尽くすまで長い時間はかからなかった。

瑠衣が目を覚めたのは暗くて濡れた場所だった。体の節々が痛むのをこらえつつ、記憶の糸を辿って自分が公民館にいたということを思い出すが、ここは公民館にあるような場所ではなかった。気を失う直前に見たようなネズミの姿はない、しかし、例の臭気はいっそう強くなっていた。

胸の上に何やら重いものが乗っている。目が慣れるのを待ってみると、それは統也の頭だった。

「なにしてんのよ！」

慌てて払いのけ、その衝撃で統也も目を覚ました。

「こ、ここは……？ なんだかすごく軟らかくて……臭かったような……」

頬を赤らめた瑠衣の拳が、統也の顔面にめり込んだ。

見上げてみると、天が割れて光が差しているのが見えた。その光を目指して無数のネズミたちが崖を登っていた。あの場所が瑠衣たちのいた床なのだろう。

本来なら床を支えていたはずの大地はネズミに掘り進まれてか、薄く頼りないものになっていた。そこに瑠衣と統也が並んでいたせいで耐えられる限界を超えたのだろう。

「る、瑠衣さん……これ……」

殴られ、尻餅をついていた統也が泣きそうな顔をして床を指さした。

あらためて見回してみると、瑠衣がいる場所は下水だということが分かった。下水の天井を掘り進んだネズミたちの中で、力尽きたものは落下して溜まっていった。何万とも数えるのが嫌になるようなネズミたちは、光を目指してそうしたのか、それとも別のものを求めたのか、瑠衣と統也の命は彼らに支えられたともいえるし、二人は英霊を踏み付けにしていると言っても良かった。

そう、落下の衝撃から二人を守り、今二人が尻に敷いているのは、腐敗して下水を吸い込み、ドロドロに崩れ落ち腐り果てた大量の死骸だった。生きているネズミはここにはいない、皆外に出て行ったのだろう。

瑠衣は声にならない声を上げて立ち上がった。それでも、足の下にはドロドロの物体がある。

制服はありとあらゆる箇所に汚水が染み込み、公民館で嗅いだ悪臭が体にすりこまれてくるようだ。尻が痛むと思ってさすってみると、なにかの木片が突き刺さっていた。二人は半べそになり、ここから脱出しようとしたネズミたちの気持ちが分かると思った。こんな場所に一分一秒だっていたくない。

大声を出して助けを呼んでも誰の声も返って来なかった。それどころか腐敗し淀んだ空気を肺腑の奥へと吸い込む行為でしかなかった。

統也が入学祝に買ってもらったばかりの携帯は、落下した時に壊れたのかまったく反応しない。助けが呼べないなら、自分たちで何とかしよう、まずはこの悪臭から逃れようと、とにかく動くことにした。

落ちてきたところに戻ろうとして壁に張り付くと、ボロボロと崩れているので手はかけやすかったが、少し体重をかけると簡単に崩れてしまい、まったく登ることができなかった。

瑠衣が走りだし、統也もそれに続いた。だが、それはネズミの死骸を踏み付けて足をめり込

ませ、その中を走るといふ筆舌に尽くし難い拷問だった。

天井から差し込む光から離れると、そこは薄暗いを乗り越して真っ暗な世界だった。

瑠衣は進行方向右側の壁を、統也は進行方向左側の壁を辿りながら、小刻みに声を掛けあって進んだ。

「そこにいるわよね？」

「はい、でもこっちの壁にはなにもなくて……」

「こっちもよ……」

腐ったような空気を吸い込むことも構わずに二人は声を掛け合った。こんな最悪な場所においても声を発すると返事が来るといふのは大きな救いだった。

「なんでこんなことになってるんだと思う？」

「さっぱりわかりません……なんであんなネズミが……」

「だよね……」

瑠衣は思わずため息を吐いた。反射的に空気を吸ってしまうが、さっきまでよりいくらかマシなものになっていることに気付いた。

「出口……近いのかな」

「そうだといひですね」

一歩一歩進みながら、次こそ手にハシゴが触れて欲しいと祈る。

「私さ、子どもの頃ハムスター飼いたいって言ったことあるんだ……」

「奇遇ですね、僕もありましたよ……」

「でももうネズミは懲り懲り」

「ネズミはもう一生分体験しましたね」

不思議なもので、今ではこうして軽口が叩けるほど元気が湧いてきていた。もう時間の感覚も無く、夕食時を過ぎているのか空腹感と喉の渇きだけが増していく。水ならばすぐそこにあるのにと感じてしまう自分が怖かった。もし、数日間ここにいることになったなら、汚水でも口にしていたかもしれない。幸いそんなことになる前に、二人はハシゴを見つけることができた。

その時の二人の感激と喜びは言葉にならないものだった。枯れたはずの涙を溢れさせてハシゴを登った。

地上は、すでに闇に包まれていたが、下水と違って文明に照らされた明るい闇だった。

「街灯ってこんなにありがたいものだったんだ……」

「いつも見ていたのに、今日まで気付きませんでしたね」

街灯や星の明かりがこれほど美しいと思ったのは初めてだった。どんな場所でも明かりがあって当然という思いが、いかに不自然で恵まれていたことか骨の髄まで刻み込んだ。

「ねえ、今まで見てたのって夢だったってことないかな？」

「だったらいいんですけどね……」

嗅覚はすっかり麻痺していたが、服にはしっかりと粘つく何かがこびりつき、汚水が染み込んでいた。

二人は顔を見合わせた。それから辺りを見回すと、見慣れた通学路だということが分かった。公民館からは数キロ離れていた。

ネズミのことは気になるが、まずは家に帰らなければと、最後の力を振り絞って歩き出した。

瑠衣と統也がこのような足取りでそれぞれ家路を歩いている頃。佐武は、借りにいった新作DVDが残らず貸出中だったため、手ぶらで家に向かっていた。

本音を言えばレンタルではなく購入、DVDではなく映画館で観たいのだが、いかんせん財布の中身がそれを許してくれない。枉津市で唯一残っていた映画館も佐武が子供の頃に潰れ、映画一本見るために遠出しなければならない。

文句を言おうにもいう相手もなく、公園の前を通るとどこからか猫の鳴く声が聞こえた。

「ん？」

軽くあたりを見回すが声の主の姿はなかった。しかし、声は止むことなく続いている。

「おかしいな」

今度は注意深く耳を澄ましながら探してみる。姿さえ見れば何だそこにいたのかと思って終わるようなことだ。程なくして猫の姿は見つかった。地面ではなく公園の木の上にあったのだ。

「なんだ、そんなところにいたのか」

登ったまま降りられなくなったのか、妙に地面を警戒している。マヌケなやつだなと思いながら見ていると、木の幹が真っ黒に染まっている。暗いからというわけではない。不思議に思って近づいてみると、何かが木にまとわりついて蠢いているのがわかった。離れているときは分からなかったが、近づいてみると気分が悪くなるような臭いもする。

おかしいなと思って佐武が一步退いたその時、木にまとわりついていたそれは、登るのを諦めて佐武に飛びかかってきた。

それがネズミだと気づいた次の瞬間、ネズミの爪が佐武の眼球に突き刺さり、痛みを感じさせる間もなくズルリとひきずり出した。柔らかい目玉に群がり、奪いあって貪る。競争から締め出されたネズミは次なる糧を求めて佐武に襲いかかった。悲鳴をあげようにも、喉に詰まったネズミがそれを許さない、そいつは喉の中を掻き糞りながら進み、呼吸もままならなくなった佐武は、木にもたれかかるように倒れこむとピクリとも動かなくなった。

家に付いた瑠衣を待っていたのは、姉の滝音が見せた怒りの形相だった。両親は不在で、祖母父母の代からあるこの家で瑠衣は姉と二人で暮らしている。

「こんな遅くまでどこでなにしてた!？」

鍵のかかった玄関の扉が開いた途端に響き渡る怒声、そしてそれを発した口は次の瞬間さらに歪んだ。

「な、なんだっ、その臭いは!」

「こ、これはその……」

滝音の職業は看護師だが、病院で見せる白衣の優しさとは裏腹に、家ではさながらくわえタバコの鬼だった。

「んなクセー臭いプンプンさせて、家に入ろうってのか! おら、庭に回れ!」

口答え一つできずに、瑠衣は庭へと追いやられた。

「逃げ」

口から酒の匂いとタバコの煙を吐き出しながら滝音が命じる。

「とっとと逃げよ、それともぶった切って欲しいか。私は上手いぞお」

冗談でもなんでもなく、滝音は服を切るのが上手かった。普通に服を脱がせると傷に障るような患者が運ばれてきた時、服を切る役が回ってくるのはまず滝音だ。そのことは瑠衣もよく知っていた。そして、酔った姉は本当にそれをやりかねないということも。

「う、恨むからねお姉ちゃん……」

複雑な心境になりながら瑠衣は制服を脱いだ。生け垣のお陰で外からは見えないはずとはいえ、下着にまで汚水が染み込んでいたが、さすがの姉もそこまで脱ぐことは要求しなかった。

「よ～し、そのまま立ってろ」

と言うと、滝音は愛車を洗う時のように、手加減なしに水をぶっかけた。

「きゃっ! 冷たいじゃない!」

「冷たいのが嫌ならんな格好で帰って来んじゃねえ」

反論のしようもない冷たい正論と冷たい水を浴びせられ、瑠衣は返す言葉もなくして凍えるしかなかった。

「女子高生のびしょ濡れショーか、客が取れそうだな……いや、ここは美女濡れかぁ」

水浸しになっている瑠衣を見ながら、滝音はオヤジ臭くも恐ろしいことを平然と口にする。

今日のことは絶対忘れてやらない。瑠衣はそう心に誓った。そして、瑠衣の体から放たれる臭いがどうにか気にならなくなった頃。玄関でインターホンを何度か鳴らした統也が、一向に返事がないので音のする庭の方に走ってきた。

「る、瑠衣さん……」

急いできたたせいで、肩で息をしていた統也が顔を上げると、目の前には汚水の色に染まった下着だけを身につけた瑠衣の姿があった。

「え、な、なにこれは……?」

さっきまで非現実的な異空間にいた統也だが、今の光景も十分に異空間だった。

女子高生が、野外で、水を滴らせて、薄汚れた下着と対比的な純白の肌を月明かりに晒して

いる。

混乱したままの統也は、瑠衣の鉄拳を顔面に受け、鼻から真っ赤な血がほとぼしらせながら地面の上を転がりながらも、喜びを噛み締めていた。

「すまなかったな、少年。変なものを見せて」

家に入った統也に茶を出しながら滝音が言う。その目にはハッキリと見て取れる笑いが浮かんでいた。

「い、いえ、そんな……」

目を閉じるとさっきの光景があたりと浮かんだ。瑠衣に知られたらどんな目に遭わされることかと寒気がするが、それ以上に心が暖くなるのが止められなかった。やはり嬉しいは嬉しい。だが、瑠衣の家に来た理由を思い出すと、喜んでばかりもいられなかった。

「あ、あのお姉さん……」

「ん、なんだ、瑠衣の風呂を覗きたいのか？」

滝音にからかわれて、統也は顔を赤くして首を横に振った。

瑠衣は生き返った心地でシャワーを浴びていた。

密閉された狭い空間に、湯気が溢れていく。世間の冷たい風と、水道の冷たい水に冷やされた体にはたまらない至福の一時だった。

体に当たるお湯を弾いている様子を呆然となって眺めていると、しみじみ幸せというものが感じられた。

ドブを這いずりまわった不幸、庭で水をかけられた不幸、統也に下着姿を見られた不幸。怒涛のように押し寄せた不幸の波も、こうしてシャワーを浴びるだけで流れ落ちるのだから人間なんて不思議なものだとしみじみ思った。

湯船に肩まで使っていると、湯の中に疲れと汚ればかりでなく、身も心も溶け出していくようだった。

十分に温まって風呂場を出ようとする、今度は体にまとわり付いた水滴が邪魔なものに思え、つくづく人間とは不思議なものだと思って笑みがこぼれた。

瑠衣が脱衣所に出た時、丁度脱衣所の扉も開いていた。

「る、瑠衣さん、な、なんで、まだ出てないって……滝音さんは、あいつは長風呂だからって…
…その……」

そんな瑠衣の笑顔を凍りつかせたのはまたしても統也だった。

「あ、あの、これは……その……滝音さんに着替えを持っていけって言われて……」

滝音の罠に嵌められ、しどろもどろになっている統也に、またしても瑠衣の鉄拳が飛んだ。体が冷えきっている時とは違い、温まっている分威力も増していた。だが、それでも統也は自分が不幸だとは思えなかった。鼻から血を流していても幸せを感じられるのだから、つくづく男とは単純にできていると思った。

瑠衣が、気を取り直して統也の話聞いたのはそれから一時間が経ってからだった。

「僕はただ、これを見てもらおうと思って……」

ようやく気を静めた瑠衣に、統也が渡したのはボロボロの手帳だった。表紙には瑠衣もよく知っている校章の欠片が飾られていた。

「これってうちの高校の生徒手帳じゃない……」

中を開いて見ると、劣化が著しくかろうじて表紙裏に書かれた文字が確認できる程度だった。

「神楽……夏夜……」

それがこの手帳の持ち主の名前だった。瑠衣にはまったく覚えのない名前で、顔写真も手帳と同様に大部分が破損し、かろうじて分かるのは、長い髪を後ろでまとめてポニーテールにしているらしいということだけだった。生年月日から計算すると、入学したのも今から三十年前ということになる。瑠衣の先輩には違いないが、会ったことなどない。

「これ、一体どうしたの？」

「えと、家に帰って服を脱いだ時ポケットにそれが入ってることに気付いたんです」

「そう……」

瑠衣は、統也の話も上の空に生徒手帳の写真を見つめていた。

「たぶん、トイレの床が抜けて落ちた時に紛れ込んだんだと思いますけど……」

目を覚ました時の状況を思い出して統也は顔を赤くして伏せた。

「思い出すな！」

統也の脳裏に浮かんでいる情景を察した瑠衣の拳が飛んだ。勢い良く倒れた統也のポケットから、生徒手帳と同じくらい古びた紙が抜けて落ちた。

「なにこれ？」

瑠衣は反射的にその紙を拾った。

「その手帳と一緒に入ってたものですけど……この件と関係あるかもしれないって思って、それで急いで来たのに……」

瑠衣が手にした紙は、三十年前に使われていた新聞部の原稿用紙と書かれていた。

「この原稿に書かれてる日付って三十年前の今日……よね、この原稿は書きかけみたいだけど……」

使っているのは原稿用紙ではあるが、これは原稿のそのまま下書きらしく書かれているのはただ一言。『本日、墓地で鼠慰霊碑が発見される』というものだった。

鼠慰霊碑というのがどういうたぐいのものかは分からなかったが、あのネズミを見てしまったあとでは、なにか嫌な予感がしてならなかった。

「偶然……だと思う？」

「だったらいいなとは思いましたが……この手帳と原稿は……どこかで見つけたものを忘れていたとか……」

「そんなことあるわけないわよね……」

瑠衣は息を吞まずにはいられなかった。風呂で汚れと一緒に抜け出ていった恐怖が蘇ってくる。

二人は背筋を嫌な感覚が駆け抜けていくのを覚えた。それは、初めて体験するものではなかった。そしてそれは滝音も感じていた。

「な、なあ、なんか……外が騒がしくないか……」

滝音がそう言ったときは、まだうっかりすれば聞き逃すような小さな音だったが、それはすぐに大きな音に変わっていった。音は四方八方へと広がり、耐え難い臭いを伴ってありとあらゆる方向から瑠衣たちを取り囲んだ。

全身を包み込むように迫ってくる悪寒と悪臭には確かに覚えがあった。本能を刺激するような、今まで感じた中で最悪の感覚。

「私の気のせいってことないかな」

「だったら嬉しいですよ、僕のも気のせいだったなら……」

「これって実は夢で、目が覚めたら暖かい布団の中にいるとか」

「いいですね、そういうの……お風呂でうたた寝してたってパターンでもいいですよ」

その希望も虚しく、二人とも今の自分の目も耳も鼻も口も、ハッキリと機能していた。

「それこそ夢……なのよね……」

統也は、肯定したいわけではないが、頷く以外にできることがなかった。

「やっぱりこれのせいなのかな……」

瑠衣は手に持った原稿用紙に改めて目を通し、統也が見たという夢のことを思い出した。

「その鼠慰霊碑って……どうなったんでしょうか……？」

「三十年前はあった、っていうか見つかったのよね……墓地で見つかったって言うなら、他のお墓と一緒に他所に移されたか……壊されたとか……」

「あいつらそのことを怒って……考えたくないですけど、人間を襲う気なんでしょうか……」

統也の言葉を肯定するように、雨戸に食いついていた音が大きくなり、雨戸が消滅すると共に消え、雨戸とガラス戸の間におぞましい姿が溢れかえった。増え続けるネズミはガラス戸を圧壊してそこから、屋根瓦を齧り壊して天井から、畳を食い破って床下から、ありとあらゆる方向からネズミどもが襲ってきた。

これが初めてであったなら、今の滝音がそうなっているように呆然となって襲われてただけに終わっただろうが、幸か不幸か一度体験していた二人の動きは機敏だった。

「お姉ちゃん、こっち！」

瑠衣は、棒立ちになっている滝音の手を掴んで、ネズミを蹴散らしながら玄関へと走った。あまりいい感触ではないが、下水の中で踏みつけたあれよりは何倍もマシだった。

ネズミたちの集団には統率するものがないらしく、それぞれが勝手な行動をとってはいた。特に、出しっぱなしの野菜や食べ物が置いてある台所が一番人気のようだったが、数が多すぎるせいで家のどこもかしこもがあっという間にネズミで埋め尽くされた。それでも飽きたらず、ネズミはどんどん数を増やし、最初に入ってきたものはもう下敷きになって押しつぶされている。

瑠衣たちは後ろを振り返らずに玄関までたどり着いたが、その時になって車の鍵を持たずに来たことに気が付いた。

だがもう遅い。今からあのネズミの群れの中に戻っていくことなどとてもできない。立ち止ま

ることなく、靴をカカト踏みにして外へ飛び出す。そこは家の中以上の凄まじい光景が広がっていた。

見たわす限りがネズミで埋まり、鳴き声だけで体が振動し鼓膜が破られそうだった。

「な、なにこれ……」

驚き怯みそうになる体にムチを入れて、体に這い上がってくるネズミを振り払い蹴散らしながら走る。

せめて自転車があればと思うが、通学用に使っているのは学校に置いたままだ。

三人は死力を尽くして走った。

「お風呂入ったばかりなのに！」

瑠衣のみならず、三人ともが仲間に押しつぶされたネズミの死骸を踏みながら走っていた。すでに地面を歩いている感覚はなく、ゴツゴツとした何かや、ブヨブヨとした何かを、液体的な感覚とともに踏みしめる。一步ごとに神経を蝕まれる不快さがあった。周りを見ると、ネズミの天敵であるはずの猫でさえ、怯えて木に登っている。昼間くだらないと思っていた、木に登って降りられなくなった猫が多発しているという事態が、笑い事ではなかったと知った。

「なんなんだよこれは！」

滝音が叫ぶ。

我を取り戻すほどに、この異常事態が理解を超えていることに気付いていく。

「そんなに汚して！ 今度はお姉ちゃんを庭先でひん剥いて水ぶっかけてやるからね！」

全力で駆けながら瑠衣が滝音に向かって叫ぶ。

「誰に向かってんな口聞いてんだ！ あとで見てろよこんガキヤあ！」

妹に情けないところを見せたくない姉のプライドが叫び返させた。

「二人共何言い争ってるんですか！」

姉妹二人の意地の張り合いに挟まれた統也は普段の二倍の心労を感じて叫んだ。

瑠衣たちは叫び合いながら走り、気が付くといつもの通学路を辿って学校へと着いていた。見れば、同じように避難している人は大勢集まっており、同様にネズミたちも集まり昇降口のドアの前にひしめいているため、瑠衣たちは窓から迎え入れられた。

学校の中から外を見ると、闇夜の中にネズミがはびこっているのが薄っすらと見えた。

滝音は、愕然となっている瑠衣を尻目に、保健室で怪我人の応急処置に当たった。

あれだけ口論しながら走っていた後なのに、そんな元気と職業意識が残っている姉には、瑠衣も素直に感心した。

怪我のない者は机等を引っ張りだしてバリケードを作りネズミの侵入に備えていたので、統也もそれを手伝いにいった。その一方で、あの獰猛なネズミ相手には何をしても無駄だと諦めている者も多い、その中には、新聞同好会顧問の地頭の姿もあった。

「せ、先生、こんなところで何を……？」

瑠衣が声をかけても、地頭は力なく座り込んだままで、その髪のない頭を上げようとはしなかった。見ているとすっかり諦めたのがハッキリ分かって腹立たしくなり、気が付くと地頭の禿げ上がった頭を思い切り引っ叩いていた。

「あっ……」

しまったと思った時には、廊下中にいい音が響き渡っていた。

「な、何をする」

「『な、何をする』じゃないわよ……先生のくせに真っ先にへたり込むなんてだらしないうたらないじゃない！」

胸を張って答えながらも、瑠衣の顔はいくらか引きつっていた。頭や口よりも先に動いてしまう体が恨めしい。

「人の苦労も知らないで勝手なことばかり言いおって……見ろおかげで俺の頭はこの有様だ！」

禿頭を指差して怒鳴る地頭。

「そんなの生まれつきでしょ」

「生まれつきのハゲなわけあるか！」

普通の地頭は、いくらか残った髪をなんとか工夫して、自分はハゲじゃないと言い張っているところがあるのに、今の態度はヤケになっているのがよく分かった。

「俺だって、この学校に赴任してきたばかりの頃はなあ……ふさふさで、有り余るほど髪があったんだ、それがお前らに苦労させられてるおかげで今じゃこんな……」

半泣きになった地頭が、ツルリとした頭と僅かに残った髪を撫でると、残っていた髪もハラリハラリと抜け落ちていくのが見えた。

知り合ってから短いけど、迷惑をまったくかけていないとは言い切れない瑠衣の胸がチクリと痛んだが、それはすぐに吹き飛んだ。

「そういえば、先生この学校にきて長いんですね？」

「ああ……大学を出てすぐだから……もう三十年は前か……」

ただ話題を変えようとしただけだったが、地頭の言葉に瑠衣の耳が動いた。

「三十年前、なんですか……それじゃあ……その……神楽夏夜って人を知りませんか」

「ど、どうして夏夜のことを？」

地頭の驚きは、瑠衣も驚くほどのものだった。

「知ってるんですね？」

「知ってるも何も、夏夜は……あいつは……」

彼は懐かしそうに夏夜の名を呼び、そしてその表情を曇らせた。

「どんな人なんですか、今はどこにいるんですか!？」

瑠衣が詰め寄るが、地頭の耳にはそれは入らず、一人で考え込んでいるようだった。

「あいつが失踪して三十年目に、こうして名前を聞くなんて、不思議なこともあるもんだ……」

「三十年目って……何があったんですか! いったい何が!？」

「思い返してみれば、あいつが手の焼ける生徒の第一号だな。学校帰りに墓地に行くって言ったきり行方不明だ……何かの事件に巻き込まれたとか言われて、そうは思いたくなかったが、またこんなことが起きないように新聞部を取り上げたが……」

瑠衣は、地頭の言葉も程々に、胸のポケットに入れていた夏夜の書きかけの原稿を取り出して、日付を確認した。やはり、三十年の開きはあるが今日と同じ日付だ。

瑠衣の背中に冷たいものが走ったが、同時に何かを掴んだという熱も駆け巡った。

統也がこの原稿を見つけたのも、元は墓地があった場所だ。

「それじゃ、これは夏夜さんがいなくなる直前に書かれたものなの……?」

ポケットに入れていたペンを取り出し、見ている紙に『神楽夏夜、1984年4月20日に墓地に行くと言って失踪』と書き込む。書いてから、これは自分の原稿ではないと気付いて頭を掻いた。

「そ、それで、その夏夜さんはなんで失踪したんですか?」

「あの時俺が止めていたらな……今更言っても手遅れか……」

それっきり、地頭からは何も聞き出すことは出来なかった。心のなかに溜め込んでいた毒を吐き出すように、地頭は力なくブツブツと聞き取れないことを繰り返すばかりだった。

瑠衣も、そんな地頭を放ってバリケードを作りに行った。ネズミの襲来を完全に防ぐのも不可能だろうと予想は出来たが、何かすることがあるというのはありがたかった。

皆が無心でバリケードを作る、それは久しく見ない団結だった。

バリケード作りを終えると、今まで聞こえないふりをしていたネズミたちの奏でる騒音だけが全方位から鳴り渡り鼓膜を刺激した。

恐怖に押されるようにして、瑠衣は普段使っている教室へと向かった。意識的に行こうとしたわけではなく、帰巢本能のようなものが瑠衣を突き動かした。途中で統也と合流し、どちらが誘うわけでもなく一緒に教室にまで歩いた。

いつもなら人がいるはずの教室も今日は他に人がいない。それは、学校に避難できた人間が少ないことを意味していた。

「電話……携帯はダメでも固定ならどうかな」

統也が疲れ果てた体を引きずって、教室に置かれている電話の受話器を持ち上げて少し操作をしてみてから、黙って首を振った。

「さっきパソコンも試してみましたけど……ダメでした。ネットが繋がらなくて」

携帯電話も中継アンテナを破壊されたのか、アンテナが立たず通信不能になっていた。

「電話ダメ、ネットもダメとなると世界から置いてけぼりにされた気分ですね……」

統也が諦観を漂わせている姿を、瑠衣は座りなれた椅子から見ていた。

「私はそういうの使えないからよく分からないけど、昔はそういうのなかったんだし、使えなくなったからってだけで諦めるのは速いんじゃない」

そう言って勢い良く椅子から立ち上がる。

「何をするんですか？」

「今日の事を少しでも記事にしておこうと思って、一応新聞同好会なんだし……これが最期ならなおさらちゃんとしたいじゃない」

最期という思いは統也も感じていた。それでも不思議と焦りも苛立ちも湧いて来なかった。昨日までの日常が崩れ去ったことも、誰かのせいだと考えることもなく、そういうことなんだと受け止められる心境になっていた。

「そうですね……」

統也が頷いた時、学校中の電気が一斉に消え、星明りがいつにない存在感で窓から飛び込んできた。

「停電……これもあいつらのせいですね」

「敵もさるものね……でも、ネズミに負けるなんて人間としてシャクよね」

瑠衣は星明かりを頼りに紙とペンを探した。ペンはマジックからボールペンまで色々見つかったが、学校中の紙という紙はバリケードの隙間を埋めるのに使い果たし、ここにある紙は瑠衣が持っている一枚だけだった。

「これ、一体何だったのかな……」

「なにして言うなら、何から何まで分からないことだらけですよ」

「そう、結構ハッキリしてるじゃない。三十年に見つかったっていう鼠慰霊碑と、夏夜って女の人の失踪、その頃に歯車が狂ったからこんなことになったのよ……たぶんね」

窓から外を見下ろすと、見慣れているはずの景色がどす黒い闇に染まってしまっているのが見えた。

瑠衣は残された時間が少ないことを感じながら、マジックペンで机に直接書き込んでいった。今わかっていることの断片、自分自身の推測。それは、夏夜の失踪から始まるオカルトまがいの物語だったが、統也はそれを笑いはしなかった。むしろ、こんな状況でそこまで考えられる瑠衣のことを尊敬する気持ちにさえなった。

程なくしてネズミたちは校内に大挙して押し寄せた。窓ガラスは一枚残らず圧壊し、せっかく築いたバリケードは齧られバラバラになって姿を消した。

教室に押し寄せたネズミに噛み付かれ、瑠衣は握っていたペンを落とす。ネズミを振り払おうにも、瑠衣にも統也にも次から次に襲いかかり、全身をネズミが覆い尽くすのに数秒とかからなかった。

校内に逃げ込んだ人間たちが全滅するのに、一時間とかからず、枉津市が廃墟となるのに三日とかからなかった……

前編……了 NEXT 30 years ago

彼女は、転がり落ちたペンを拾うために身を屈めたが、落ちたはずのペンの姿が見つからない。もしやと思って、足首まであるスカートを捲ってみると、丁度その下にころがりこんでいた。取ろうと手を伸ばすと、長い髪のが床に触れたが気にするような性格ではない。だが、使い慣れた新聞部の部室とももうじきお別れかと思うとつい感傷的になった。拾い上げたペンもいつもなら軽快なリズムを刻みながら原稿用紙の上を走るのに、今日は原稿に向かうことなく指の上で回っていた。

「あーあ、納得いかないなあ」

現在、枉津私立高校新聞部唯一の部員である神楽 夏夜（かぐら かや）は、そうぼやいてペン回しを止めた。体を伸ばしながら、切れ長の目を閉じると、新聞部に入って今日までの一年間の思い出が浮かんでは消えた。

後の衰退を知らずに、この時代の枉津市は、日本で最も豊かな都市とまで言われるほどの街だった。

駅前には映画館が乱立しているのを筆頭に、娯楽にこと描くようなことはない。教育に関しても、ありとあらゆるところに潤沢な資金が注ぎ込まれ、学校には全ての部活に部室を与えてもまだ余るほどの部屋があり、贅を凝らした趣向はないが、何をするにしても困るようなことがないよう配慮され、学生たちが学ぶこと、己を鍛えることには十分過ぎる環境が整えられていた。それにもかかわらず、夏夜は今頭を抱えていた。

「そうだろうね」

夏夜の様子を見ていた氷豊 晴空（ひとみ せいくう）が言う。夏夜がソラと呼ぶこの三年生の男子は、写真同好会を作って屋上を部室代わりに使っている。夏夜とは良き相棒だ。

「そりゃそうよ、まさか二年になって早々新聞部が活動停止だなんて」

「夏夜さん、やり過ぎちゃったからね」

「軽く言ってくれちゃってるけど、ソラセンパイはどうなの？ 同じように活動停止命令出たんでしょ」

「僕の方は部じゃなくて一人ぼっちの同好会だから、活動停止させられたって何も変わらないさ」

長く綺麗な指を自在に操って丁寧にカメラの手入れをしながら空が言う。繊細で品が良く虫も殺さないようなこの優男が背負っている、訳ありの過去を知ると誰もが驚くだろう。ただし、それを知る者は限られているが。

夏夜は改めて部室を見渡し、当たり前に使っていた部室が今では去りがたい思い出の詰まった空間になっていたということに気付かされた。それでも、いつまでも感傷的になっていても仕方ないと、ペンを紙の上に乗せて走らせる

「綿貫建設めえ、よりにもよって学校に文句言うなんて！」

再び紙の上を滑っていた夏夜のペンが『マンション建設反対運動激化』と書いたところで止まる。

「まったくだね、一人しかいない同好会を潰されたってだけだけど、僕だって頭にきてるよ」
心が乱れたと、晴空は手にしていたカメラを机に置いた。

夏夜が今書こうとしているのは、綿貫建設という建設業者が墓地を潰してマンションを建てようとしていることの記事だ。当然、墓を持っている人は反対し、反対運動にまでなった。成り行きではあったが、その運動に夏夜がいる新聞部が関わり、夏夜が関わったのを切っ掛けに晴空一人の写真同好会も新聞部に協力していた。

それが目障りになった建築業者は学校に苦情を入れ、それを受けて学校から新聞部と写真同好会は、無期限の活動停止が言い付けられた。そうすると、学校に目を付けられるのを嫌った部長が逃げ出し、後はそれに続けとばかりに次から次に部員が辞め、現時点で残っている新聞部員は夏夜ただ一人。このまま行けば活動停止どころか部員不足での廃部になるのが目に見えていた。

近日中には部室を明け渡さなければならず、この記事も新聞にはならない。それでも書いているのは新聞部としての最後の意地だった。

憤懣やるかたない気持ちを抑えてペンを走らせたつもりだったが『跡地にはマンションが建つ予定』と書いた時には気持ちの抑えようがなくなっていた。

「ソラセンパイ……帰りましょうか……」

後は明日にしようと、夏夜は記事もそのままに晴空と一緒に部室を出た。後何回この鍵使えるのかと考えながら鍵を掛ける。

晴空と別れた夏夜は、夕焼けを眺めながら考えた。このままおとなしくしている方が賢いということには分かっている。それでも、鬱々とした気持ちは際限なく湧き立ってくる。

家に帰ると、年代を重ねた社が夏夜を迎えた。夏夜の家は代々続いた神社だが、自慢できるようなものもなく地域の人からも忘れられている。夏夜の目から見ても、有り難みや神々しさは感じられず、気持ちは静まらず畏まった気持ちにはならず、鬱々とした気持ちで夜を過ごした。

翌朝、夏夜は昨日の気持ちを引きずったまま、学校に行こうとして家を出た。

「夏夜」

そんな彼女に声を掛けたのは、神社の前でホウキがけをしていた彼女の祖父、神楽 義楼（かぐら ぎろう）だった。

「おじいちゃん」

齢を重ねて頭はすっかり白くなっているが、瞳の奥には堅固な意志を思わせる眼光が宿り、心身ともに未だ壮健。若い頃から武勇伝を作りその数は、戦前戦中よりも戦後のほうが多い。夏夜はこの祖父のことが好きだった。

「何やら悩みがあると見た」

「はは、わかっちゃう？」

「そりゃあ分かる、孫のことだからな。それに夏夜は考えていることがすぐ顔に出よるから分かりやすい」

「わ、私ってそんなに分かりやすい？」

「それが夏夜のいいところだ。腹でなにを考えているか分からん奴よりよほど信用できる」

その言葉は夏夜の胸に突き刺さり、胸に溜まっていたものを溜め息と一緒に押し出してくれた。心の奥底で沸々と燃えたぎる何かがあるのは間違いない、それに蓋をしておこうとするから気持ちがわめき出すのだ。

「自分に嘘を付くとお天道さんに笑われるぞ。やると決めたことをやり抜く、ワシはそうやってきた。邪魔をする相手はそれこそ蹴散らしてな」

その言葉に嘘がないことを夏夜はよく知っていた。己を貫くために命をかけるような義楼を尊敬しているし、憧れてもいる。

「おじいちゃん……私もやる、やっぱり負けたくないもの」

そう口にする、胸の中でつかえていたものがすうっと消えていった。

もう一度空を見る、するとついさっきまで自分が何をためらっていたのかさえ思い出せなかった。

「忘れもんじゃぞ」

駆け出そうとする夏夜に、義楼が忘れ物を手渡す。元は義楼の物だったものだが、子供の頃の夏夜が欲しがりお守りにしていた。

「ありがとう」

夏夜はそれを制服のポケットに仕舞い、学校に向かった。

放課後、職員室の片隅に三人の教師が集まっていた。

「見ましたか、昨日一日の夏夜の顔を」

口火を切ったのは中年の鬼島恭介だった。2年前に結婚し、つい最近女の子が生まれ久美と名付けた。

「見ましたとも、叱られた犬のようにガックリとなって」

愛用の湯飲みを手にして、近年稀な喜びを顔に出しながら返したのは間宮清正。老齡と言ってもいい年齢で、今年度いっぱい学校を去ることになっている。

「まったく、あの調子で暴れられたら僕達のクビだってどうなっていたか」

からかいながらも、冗談にしきれない怖さを隠せないでいる若いのは、教師になって日が浅い地頭幸治。この面子の中では唯一の独身貴族であり、平民になろうと涙ぐましい影の努力をしている。それが平民になるためではなく、貴族から妻という主の奴隷になることだという事をまだ知らない。

「おお、怖い怖い、まったくあいつらときたら放っておくと何をしでかすかわからんからなあ、今のうちに牙を折ってやったほうが本人のためでしょう」

「全くですね」

鬼島の同意を得て気を良くした間宮は更に饒舌になった。

「だいたい女なんてものは男の言うことをはいはいおとなしく聞いてりゃいいんですよ、それがあの晴空ときたら中学の頃は荒れてたとか聞いているが、今じゃ夏夜にはいはい従うばかりで、まったくもって嘆かわしい」

「間宮先生は亭主関白でいらっしゃるから」

「いやいや、ガツンといけばいいんですよ、今回みたいに。神社の娘なんだからかしこみかしくみってね」

三人は声を揃えて笑い、その声は部室に向かう夏夜の耳にも聞こえていた。

昼休みには、元新聞部の人間が、夏夜も早く新聞部を辞めろと忠告に来ていたが、夏夜はその言葉を聞いたことも、そう言った相手を引叩いたことも記憶に残っていなかった。

一日中考えに考えて出した結論を胸に新聞部の部室の前に立つ。鍵を差し込むと、そこはもう開いていた。今、この部室の鍵を持っているのは夏夜と晴空しかいない。

「待ってたよ」

戸を開けると、晴空がいつもの調子で立っていた。夏夜はそれが嬉しくて、心底では怒りに燃えているのに笑みが出てしまう。

「ねえ、ソラセンパイ、私すごく腹が立ってます」

「うん、僕もだよ」

「私達がおとなしくして、マンションが建てば活動停止も解けるんでしょうけど、それじゃ私たちの負けですよ」

「そうだね、それに、夏夜さんはおとなしくしないよね。僕もそうだけど」

夏夜はにっこり笑って頷いた。

「私、新聞部を失う危険を冒してまで戦う理由があるのかってずっと考えてた。でも、そうじゃ

ない、新聞部を失うくらいならトコトン戦う！」

夏夜は、義楼から渡された物をポケットから取り出した。それは中央に深紅真円の太陽が描かれた真っ白い鉢巻、義楼が戦後に無頼を気取っていた時のお守りだった。夏夜は、それを使って長い髪を頭の後ろでまとめて縛り上げた。

「やるならカチコミ！ おとなしく泣き寝入って負けるなんて真っ平よ！！」

踵を返して部屋を飛び出した。

「ど、どこ行くんですか」

「連中に宣戦布告しに！」

それを聞いて晴空も笑顔になった。

「それなら僕も行くよ」

晴空もそれに続く。

二人は、授業開始のチャイムが流れる中を、『廊下は走るな！！』と書かれた張り紙のある廊下を全力で突っ走った。

途中、仲良くトイレに向かう地頭、鬼島、間宮の三人が邪魔になったので、夏夜はさっきのお返しとばかりに大声で叫んだ。

「どけどけえー！」

三教師は身をすくませて廊下の脇に飛び退いた。

昇降口から姿を消す夏夜と晴空を見送って、地頭が蚊の鳴くような小声を震えさせながら発した。

「と、止めなくていいんですか、さっき、ガツンと言うって……」

「い、いや、まあ……この次ですよ、この次」

間宮は力なくそう答えた。

「ほ、ほんとに、なんとかしないとイケませんね……」

鬼島の言葉には内心賛成したものの、地頭も間宮もすぐには言葉がでてこなかった。

「さっきはすごい声だったね」

学校を飛び出したところで晴空が言い、そのほうが夏夜らしいと続けた。

二人が向かったのは、反対運動の舞台になっている墓地の側に建てられた工事用の掘っ立て小屋だ。

いつもなら、反対派と綿貫建設の人間とが衝突している場所なのに、今日はただ一人の姿しか見えない。それは夏夜たちもよく知っている顔だった。

「お、お前らは……」

すでに顔なじみのようにになっている現場主任の大垣洋三（おおたき ようぞう）は、二人の顔を見るなり表情をこわばらせた。

「お久しぶりです、大垣さん」

にっこり笑って挨拶するが、大垣は逆に顔を引き攣らせた。

「なんでお前らがここにいるんだ！ またうちの邪魔をしようっていうのか！」

夏夜と晴空は、反対運動に参加していたわけではなく、そもそもは町内の主だった施設についての記事を書くための取材をしているに過ぎなかった、それが取材をすればするほど綿貫建設絡みの手抜き工事や不正が明るみになり、それを暴いているうちに反対運動に深く協力し、参加同然になっていた。

「一晩考えたんですけどね、このまま泣き寝入るなんて我慢できなくて」

「僕も同意見です」

噴火寸前の怒りが顔に浮かんでいる夏夜とは対照的に、晴空は実に涼やかな顔で言った。どちらの態度も、大垣の神経を逆なでするのに十分だった。

「また学校に叱られたいのか！」

大垣が、いかつい体を揺らしながら叫ぶと、夏夜も真っ向から相手を睨んで言い返した。

「手抜き工事に数々の不正行為！ それでも飽きたらずにまだまだアコギな真似をしようっていうのならどっちかがくたばるまでトコトンやり合いしましょうか！ 枉津高校新聞部総代として相手になります！」

いつから総代でしたっけと晴空は首を傾げつつも、夏夜らしいハツタリを心地よく聞いていた。

「こ、この……」

言い返そうとしている大垣の言葉を遮って、晴空が援護射撃を打ち込む。

「目には目を、あなたたちが不正という奇襲を仕掛けるのなら、僕たちはそれを暴く。あなた達が高校の運営にまで手を出すというのなら、僕たちはあなた達の会社の運営に手を出す、これが枉津高校の総意です！」

学校に睨まれているというのに、ぬけぬけと学校の総意だなどとハツタリを口にする晴空を見て、夏夜は笑いをこらえるのに必死だった。

「調子に乗るなよ、このガキども！ さては、あの騒ぎもお前たちのせいだな！」

「騒ぎ？」

まだなんの騒ぎも起こしてないと、夏夜と晴空は顔を見合わせた。

「あんな妙ちくりんなもん埋めやがって、何が鼠慰霊碑だ、ふざけるのも大概にしろ」

大垣は一人納得しているが、夏夜と晴空には何のことかまるで分からなかった。だが、たしか

にいつもならいるはずの綿貫建設の人間も、反対派の人間もいなくて、墓地の方から騒ぐ声が聞こえてくるのは確かだ。

墓地に行った二人が見たのは、石路が叩き割られ、むき出しになった地面が掘り返されて出来た穴と、その周りで騒いでいる顔なじみ達だった。いつもなら綿貫建設の掘っ立て小屋の前で行われているやり合いが、今日は誰が掘ったのかも分からない穴の前で行われていた。

反対派の人間は、綿貫建設が墓地を掘り返したと決め付けて物を言い、綿貫建設側は反対派が墓地を掘り返したと言いつつ。

「これって、どういうこと？」

「うーん、少なくとも、綿貫建設にとっては墓地を壊す意味はあるよね。納骨されている墓地を取り壊すっていうのは簡単じゃないかもしれないけど、墓石が壊されて遺骨も失くなくなったりしたら墓地と言えないかも……」

「搦め手で勝負を決めようっていうのは私達もやっていることなのよね……でも……」

夏夜が感じている違和感は、晴空も感じていた。

「そういう手があるとしても……実際に壊されているのは石路で、お墓そのものは無事なんだよね」

本来なら真っ先に壊される場所が壊されていない。いざとなったら死者の尊厳を踏みにじることに怖気づいたのだろうかと思いつつ、掘り返された穴へと近づく。大垣や、ここで騒いでいる人間の言葉によると、穴の中には何かあるらしい。

穴を覗きこんだ二人が目にしたのは『鼠慰霊碑』と書かれた板切れが顔を出している姿だった。大垣は、夏夜達反対派がこれを埋めたと思っているようだが、実際に埋まっているのはつい最近作ったとは思えないほど古ぼけていた。

夏夜はその騒ぎからそっと抜けだすと、取材は明日にして、分かったことを纏めるために部屋に戻った。

「あれって、誰かの仕業なのよね？」

夏夜は、原稿にちょっと文字を書いただけで手を止めて口を動かした。

「そりゃあそうだね、それじゃなかったら……勝手に穴が開いたとか……まさかって話だよ」

「幽霊がやったとか。墓地だし」

夏夜は冗談で言ったつもりだったが、晴空は意外にも真面目な顔をして答えた。

「そうだとしても、自分たちが眠っている墓所を荒らしたりしないね」

「ソラセンパイって、見えるの？　そういうの」

「いいえ」

「なんだ、ビックリした。真面目な顔して言うから本気にしちゃったじゃない」

「本気って、言い出したの夏夜さんじゃない」

「あれ、そうだっけ」

晴空は、とぼけてみせる夏夜の背後に周り、肩越しに原稿を見た。そこには『本日、墓地で鼠慰霊碑が発見される』と書かれているだけだった。

「全然書けてないじゃないない」

「仕方ないじゃない、まだ何も書くことないんだから……取材不足なのよ。あんな時に『これを掘ったのはあなたですか』なんて聞いて回ったら私達があそこ埋められてたわよ」

「確かに、みんな殺気立ってからね。いつものことだけど」

「私たちの目的は墓地が壊されるのを阻止することであって、あんなことをした犯人探しじゃないわ。あの鼠慰霊碑が何のためのもので、なんで埋まっていたのか、気にはなるけど後回しよ。ということで、今日はこれまで！」

夏夜は勢い良く席を立つと、戸締りを晴空に押し付けてさっさと部屋を出て行った。

今日はまっすぐ帰ってゆっくり休んで、明日は取材して回ろう。熱が冷めないうちに聞いて回った方がいい事件もあれば、興奮が冷めやってから聞きに行った方がいい事件もある。今回は後者だと感じていた。

「どうせくだらないいたずらだろうけど」

それは、つい口から出た独り言のつもりだった。

「何がくだらないんだ？」

予想外の反応が返ってきた。気付いてみればここは職員室の前で、窓から顔を出しているのは地頭だった。

「あら先生」

にこやかに返したつもりだったが、いつもその笑顔でやられている地頭からすればそれは悪魔の微笑みにも等しい。

「お前、またなにかするつもりじゃないだろうな？ これ以上余計なことをするなよ」

「余計なこと？ 余計なことってなんですか？」

「反対派の味方をして余計なことをするなと言ってるんだ」

その言葉を聞いて、夏夜はカチンとなった。思いはすぐに言葉となって口から飛び出す。

「私は真実を明らかにしているだけです。それが反対派の味方をしているというのなら、綿貫建設が世間に顔向けできないことをしているからでしょう！」

「そ、それはだな……」

答えを淀ませていると、夏夜の伸ばした腕が地頭のネクタイを掴んだ。そのまま勢い良く引っ張られ、地頭は体をへの字に折り曲げられて夏夜と顔を付き合わせた。

「あなたは教師でありながら、社会にツバする者の味方をする気ですか！」

窓から身を乗り出させられるという窮屈な姿勢になっているところを怒鳴りつけられ、地頭は返す言葉もなかった。

「あなた達が私のことをどう思ってるかは聞いてますよ。けれど、あなた達の敵役は私には役不足です！ 敵を作りたいなら、自分の力で戦える敵を見つけなさい！」

黙ってしまった地頭から手を放すと、地頭は体を起こして歪んだネクタイと乱れた髪を慌てて直して対面を取り繕った。

「ま、真っ直ぐ帰れよ」

毅然として言ったつもりだったが、声には隠し切れない震えが出ていた。

夏夜は、言われなくても真っ直ぐ帰るつもりでいたが、こう言われると、地頭に従ったようになるのが気に入らなかった。

「墓地に寄ってから帰ります！」

そう言い切って、夏夜は学校を後にした。

夏夜が墓地に着いた時には、日はどっぴりと暮れて辺りは暗くなっていた。周囲にも人影はなく、昼間の喧騒が嘘のように静まり返っている。

来ようと思っていたわけではないが、せっかく来たのだから昼間の穴をゆっくり見ておくかと墓地に入る。

「参ったなあ、懐中電灯持っとけばよかった」

あいにく月も出ていない。闇の中を、何度も歩いたという経験と星明りを頼りに歩く。墓に刻まれた戒名も読み取れないが、掘り返された大穴を見つけるのは苦勞しなかった。

身を乗り出して穴の中を覗く。

「ん～ こう暗くちゃ無理かな」

昼間見た限りではそう深い穴ではなかったと記憶しているが、今は夜のせいか穴の底が見えない。それどころか頼りない星明りでは穴の奥が動いているようにさえ見えた。

「なに、何か動い……きゃあ！」

穴に向かって身を乗り出していた夏夜は、バランスを崩し穴の中に転がりそうになったが、その体は宙で止まった。

「なにしてるんですか」

聞き慣れた声に振り向くと、そこには見慣れた顔があった。

「ソラセンパイ、どうしてここに？」

「どうしてじゃないよ」

晴空は、夏夜の体を引っ張りあげると一枚の紙を取り出してみせた。それは夏夜が書いていた原稿用紙だったが、見覚えのない文字が書かれていた。

「なにこれ……なんで私が失踪したなんて書いてあるのよ？」

「そんなこと僕に分かるわけ……って夏夜さんが書いたんじゃないの、これ？」

「書くわけ無いでしょ、こんなの」

そう言いながら、夏夜は背筋が寒くなるものを感じた。

晴空が差し出した紙には、夏夜が書いた文字の後に『神楽夏夜、1984年4月20日に墓地に行くと言って失踪』と書かれている。

「学校から帰る時地頭と会って、その時『墓地に行く』って言った記憶はあるけど……」

「まさか、だいたい新聞部の部屋には誰も入ってきてないよ、だから夏夜さんが書いたのかって……書くような内容とは思えなかったけど」

「でもおかげで助かったかも」

改めて穴の底を見るが、やはり暗くて何も見えないが、何かがいるという気配だけは伝わってくる。

「ソラセンパイ、懐中電灯とか持ってないですか？」

「懐中電灯はないけど、これでどう？」

晴空はそう言って懐から取り出したライターを夏夜に渡した。

「ありがとう」

なんでそんなものを持っていると思いながらも、黙って受け取ったライターに火を灯して、穴

の底を照らして目を凝らす。

「それにしても、さっきの夏夜さん可愛かったね、あんなふうに悲鳴上げるなんてめったにあることじゃないよね」

穴の底を見た夏夜は、晴空の言う軽口も耳に入らないほど驚愕し、凍りついていた。

「な、なに、これ……」

わななく唇でようやくそれだけを口にする。興味を持った晴空が夏夜のとなりから身を乗り出して見ると、やはり同じように固まり凍りついた。

「こ、これは……」

穴の底には何匹とも分からない大量のネズミがいた。どれもガリガリにやせ細り真っ黒に汚れている。穴の底から湧き出し、穴から這い出そうと藻掻いているうちに、後ろのネズミに食いつかれ瞬く間に骨と化す、その骨を乗り越えて穴を這い上がろうとしたネズミが、自分が餌食にしたネズミと同じ運命を辿り、どれだけやっても決して外にたどり着くことはない、おぞましい光景がそこにあった。

ただでさえゾットするような光景だが、晴空が来てくれなければここに落ちていたかと思うともっとゾットする。

「そこで何しとる！」

凍りついていた二人を溶かしたのは電気の光と、しわがれた大声だった。

驚き振り向くと眩しい光が眼に刺さる。そこには一人の老人が懐中電灯を持って立っていた。

「お爺さん一体……」

「人に名を問うなら自分から名乗らんか！」

額に怒りジワを作って老人が言う。

「失礼、私は神楽夏夜、枉津高校新聞部の部長です。こっちは……」

言葉を区切って、晴空に続きを譲る。

「枉津高校三年、写真同好会の氷豊晴空です」

二人が名乗ると、老人が額に寄せていたシワ緩くなった。怒りを沈めてくれたらしい。

「岩瀬 武則（いわせ たけのり）じゃ。驚かせてすまんかったな。じゃが墓地では騒がんようにな」

気難しそうに見えるが、きちんと接すればきちんと返してくれる、そういう人間らしい。

「しかし、こんな時間にこんなところで何をしとるんじゃ？」

「私たちはこの穴を……そうだ岩瀬さん、その懐中電灯ちょっと貸してくれませんか？」

「穴？ 穴がどうした？」

まっすぐ夏夜達の方に歩いてきた武則は、穴に気付いて素っ頓狂な声をあげた。

「な、なんじゃこりゃ、なんと罰当たりな……」

「知らなかったんですか？」

「知らん、ワシャ知らんぞ、久方ぶりに帰ってみれば墓を潰すやらいう話を聞かされるわ、拳句こんな……どこのどいつがやったんじゃ！？」

「それは私達も分からなくて、それより穴の底を照らしてくれませんか？」

武則は穴のことを怒りながらも、言われたとおり、というよりも自ら進んで穴の底に電灯の光を当てた。

「これは……」

穴の奥を見た武則は息を飲んだが、夏夜と晴空は息を吐いた。

そこには、昼間と同じように鼠慰霊碑がポツンと顔を出していた。

「まさか、またコイツを目にすることになるとはな……」

「またって、これのことなにか知ってるんですか？」

夏夜の問いかけに、武則は深々と首を縦に振った。

「あの鼠慰霊碑は、そもそもここに墓地が出来る前から存在していた」

夏夜と晴空を連れて家に戻った武則はそう言って、井戸水で冷やしておいた缶ビールを取り出し、一人で飲んだ。

「茶も出せなくてすまん、なにせ墓参りの時にしか帰らん家だから電気もガスも水道も全部止まっとるからな」

武則は第二次大戦の時に徴兵されてから、そのまま都会に居着いて、故郷であるこの土地には墓参りの時しか帰っていないという。

「ワシはもうこの町に身寄りもないし、家もこの有様じゃしな」

武則の言葉通り、家はいつ壊れてもおかしくないほどにくたびれていた。

「おっと、お前さんらが聞きたいのはワシの事よりあの慰霊碑のことじゃったな」

一本目を飲み干し、二本目の缶の蓋を開けた。閉じ込められていた炭酸が弾ける音が夜の闇の中に響く。

「あれはもう五十年は前の話しか……あの頃この辺ではネズミを見たら殺すという決まりがあつてのう」

「ネズミを？　なんでそんなことを？」

問いかけながら、夏夜はメモを取ろうとポケットの中から紙とペンを取り出す。

「ワシもようは知らなかった、当時の庄屋さんの息子がそうせいと言うとったんじゃ」

「えっ」

「都会のほうで大学を出たお人じゃったが、それだけに考えることはワシらにはよう分からなかった。まして、ワシもその頃はまだほんの子どもじゃったしな。そらネズミはありがたいもんではないが、そこまでしなくてもと思とったな、ペストなんて病気を知ったんはずっと後のことじゃった」

ペストと言われて、奇妙に思えた決まりのことも納得できた。

「それでネズミを」

「もっとも、このへんでペストが流行ったなんちゅうことはなくて、庄屋さんの息子が一人神経質になっただけじゃったがな」

「それで、慰霊碑を？」

夏夜がそれを聞いた時、武則の顔は暗く沈んだ。

「たたりじゃよ」

「たたり？」

「ああ」

三本目のビールを飲み干した武則が深々とうなずき呟いた。

「そうとしか言い用のないことじゃった。なにせ人がネズミに食い殺されたんじゃからな」

その言葉を聞いた瞬間、夏夜の背中に冷たいものがゾクリと走った。

「どこから湧いてきたのか庄屋さんの家中びっしりとネズミに埋め尽くされてのお、中がギュウギュウになったせいで戸を開けるのも一苦労でな、開けると雪崩のようにネズミが出てきおったよ。ほとんどは死んでおったがのお」

武則は余りおどろおどろしくならないように喋っているつもりだろうが、夏夜たちの脳裏には次から次に湧き出てくるネズミの群れ、意志や意図もなく、穴から這い出ようとして共食いを繰り返すただただおぞましい光景が浮かんでいた。

「そのネズミを片付けた後に庄屋さん一家の白骨が見つかったな、大騒ぎになったがあんなことは人間のできるこっちゃない、それでみんな怖くなったんじゃろうな、なにせネズミ殺しの中心になっとなった庄屋さんところがそんな目に遭ったんじゃから、それで庄屋さんの家のあったところに慰霊碑を作ってそのまま墓地になったんじゃよ。じゃがその慰霊碑もいつの間にかなくなっ
てな、今更出てくるとは思わなんだが」

武則から聞いた話は、あの穴から湧いてくるようなネズミの姿を見ていなかったら、お伽話だと相手にもしなかっただろうが、あの光景を目の当たりにした二人は、ネズミだって共食いをするよりは人間を食べるほうを選ぶだろうと思わないわけにはいかなかった。

二人は帰り道、終始神妙な顔をしていた。

「ねえ、ソラセンパイ、今私が想像していること言ってもいいですか？」

家まで半分の距離となった所で、夏夜が口を開いた。

「いいよ。たぶん、僕も同じ事を考えてると思う」

「あの穴から山のようにネズミが湧き出してきて……」

「街中を覆い尽くして……」

「手当たり次第に……」

「食い散らかす」

同じ事を考えていると思うというだけあって、晴空は淀みなく夏夜の言葉を継いでみせた。それでも、晴空の心に、してやったりという思いもなければ、夏夜がしてやられたという思いを抱くこともなく、むしろ重たく冷たい何かがいっそう強くのしかかってくるようだった。

二人はムードも何もなく、ただ暗い夜道を歩き、別れた。

同じ頃、誰もいなくなった墓地で、大垣が例の穴の前で立っていた。手にはシャベルと懐中電灯が握られている。

「まったく、何が慰霊碑だ。ふざけやがって」

悪態をついて穴の中へ飛び降りる。懐中電灯の明かりを頼りに慰霊碑を見つけ、シャベルを押し付け、思い切り体重をかけるべく足を上げた。

この夜の夏夜は、元々あった苛立ちが、分からないことだらけの苛立ちに入れ替わっただけの状態です。床に着くしかなかった。横になった瞬間、疲れが出たのか夏夜の意識は一気に現実を離れた。

夏夜は、見覚えのあるどこだから分からない場所にいた。

「どこだっけ……ここ……？」

敷かれた畳の匂い、窓から見える光景、ハッキリと見覚えはあるのにどこかは思い出せない。辺りをぐるりと見回すが、やはり見覚えはあるのにどこだか分からない。

「よう、はじめまして、って言うのかな、こういう場合でも」

背後から聞こえた声に振り向くと、そこにはセーラー服と長いスカートを着て、長い髪を頭の後ろで束ねた少女がいた。

「あなたは……」

その姿は、部屋と同じように見覚えがあるのに、誰とも分からない。だけど、ものすごくよく知っている顔だ。

「自分の顔をこうして見るってのも不思議なものか？」

「自分って、それじゃあなたは……」

まさかと思うが、確かにこの相手はとても良く知っている姿をしている。

「私なの……？」

「そういうことだな、正確には“今日死んでいたはずの私”だけだな」

夏夜には何のことかさっぱり分からなかった。

「分からなくて当然だよな、まあ、アタシは幽霊みたいなもんだと思えばいい。自分の幽霊を自分で見るってのも不思議なもんだろうけどな」

「私の幽霊……？ それにしてはなんだか……私っぽくない気がするけど」

「それは仕方ないだろ、アタシはあんたより長い時間を経験してるわけだし」

「長い時間……？」

「無理に考えることもないだろ、どうせ今から元に戻るんだ。アタシの願いどおりな」

「願いどおりって、どういうこと？」

少しずつだが、夏夜はこの相手が少なくとも嘘は言っていないということを感じるようになっていた。

「やっぱ聞きたがるか、そりゃアタシならそうだよな。あんまり言いたくないんだけどな……アタシは今日、あの穴の中に落っこちてネズミに食い殺されたんだ。なんなら自分が死んだ時の体験を語れるけど、聞くか？」

夏夜は青ざめた顔を横に振った。

「だよな。アタシも言いたくはないし、そんなことになってすごい後悔したっていうか、人柱なんて柄じゃないからな、幽霊になっちまってからも、なんとかこの運命を変えたいって思ってたんだ」

「それはそうよね、私だってそんなことになったら運命の一つや二つねじ曲げたいって思うかも」

「お、さすがにアタシだけあって話が早いな」

少女は嬉しそうに笑った。

「でもまあ、実際そこまでやる奴も少ないらしくて、変え方見つけるのも一苦労だったんだ」

けど……まあ、そのへんの苦労話は置いとくか。手っ取り早く言うと、私は未来からあるものを持ってきた」

その言葉で夏夜には十分だった。あるはずのないものがあって、それが夏夜の運命を変えたというのなら思い当たるものは一つしかない。

「あの原稿……」

「当たり、さすがよく分かるな」

「でも、それって順序が逆じゃない、過去に書いたものが未来に伝わることはあっても、未来で書いたものが過去に伝わるなんてあるわけ……」

あるわけないのに、この相手が嘘を言っているとも思えない、むしろ真実を言っているという確信さえあった。

「そんなことが当たり前にあるようなら歴史もメチャクチャになっちまって言いたいんだろ」

「さすが私、話が早いわね」

二人は同じ顔で同じように笑いあった。

「まあそれに関しては、歴史はそうやってメチャクチャにされながら出来てる言うしかないかな、まあ持ってきたからってあんまり影響もなかったりもするみたいだしな、予知とか預言とかにもそういうのがあるって話だけど、そもそも信じやしないってのがほとんどだろ」

「言われてみれば……確かに未来が分かりますなんて信用出来ないセリフよね」

「アタシだって苦労したんだ。何でもかんでもってわけにはいかないんだ」

「一つずつ順に聞かせてくれる？」

夏夜がそう言うと、相手は頷いた。

「正確に言うと、物そのもの持ってこれるわけじゃなくて、物の未来の姿形を持ってこれる」
「未来の姿……それじゃ、あの原稿は……未来の誰かが私のことを書いてあんなったものを持ってきたのね」

「そうだ。だから、持ってくるには過去と未来の両方にそれが存在している必要があるし、自分に無関係なものは持ってこれない」

「生き物はどうなの？ 例えば、あなたが……アタシがかな、死んだ日の翌日のソラセンパイを連れてくるとか」

「それは最初に思った、でも生き物は無理なんだ。記憶も持ってくるってことも出来ない。説明が難しいが、誰にでも運命的なつながりを持って相手ってのがいて、そいつと自分が関係しているものに限って持ってこれる。アタシの場合は三十年先の古川 瑠衣ってというのがそうで、そいつの影響がある物しかもってこれなかった。すごいものになると未来そのものを見て戻ってこれたりするみたいだけど、そういうのに限って大雑把にもなりがちなんだそうだ、幸か不幸かアタシは持ってこれるものが小さいおかげで正確だった」

「そう、簡単じゃないってそういうことなのね。奇跡的な偶然があったのは分かったけど、よくそこまで調べたわね」

「枉津高校新聞部部长をナメんなよ、って言いたいが、一から十まで人から教わったことをそのまま言ってるだけなんでそんな威張れないな。さてと、そろそろ還るか、歴史が変わったおかげでアタシの放浪生活も終わりだ」

「終わりって、あなた一体どうなるの？」

「さあ、初めてなんで分からないけどまあいい方に変わるんじゃないかな、少なくとも命が助かったのは絶対にいいことだ。後のことは分からないけど、戻るべきところに戻るわけだしな。三十年先がどう変わるかちょっと不安だけど……元々の歴史じゃ、私が穴に落ちた時に慰霊碑を押し込んだから、慰霊碑が崩れ落ちる三十年後までネズミの怨念は縛り付けられたままになったが……」

「怨念？」

「ああ、この枉津市は元来怨念が溜まりやすいらしい。だからまあ、せいぜい気をつけないとな。また死ぬのはゴメンだ」

もう一人の夏夜は、そう言うと周りの景色に溶けこむように消えていった。

「ちょっと待って！ まだ聞きたいことが――」

夏夜は月明かりの差しこむ部屋で、何かを掴もうとするように手を伸ばした姿勢で目を覚まし、自分が発した声を聞いた。

「えっ、あれ……」

辺りを見回すが、慣れ親しんだ部屋があるだけだった。ただ、その部屋が不思議なくらい懐かしい。まるで何年も帰っていない場所に帰ったようだった。

夢を見ていたような気はするが、どんな夢だったかももう思い出せない。なにか嬉しいことがあったような気がするし、どこか遠くへ行っていたような気もするし、ずっとこの部屋にいたような気もする。

夏夜は、それからすぐにまた寢息を立て始め、翌朝は、今までにないほど晴れ晴れとした、それこそ生き返ったような心持ちで目覚めた。

外に出ると、歩き慣れたはずの道や、見慣れているはずの街並みがやけに懐かしく感じられた。最も見慣れているはずの晴空の顔を見た時などは思わず涙ぐみそうになった。しかし、そんなどこから来ているのかもわからないような懐かしさにかまけるよりは、今こなさなければならぬことがある。

「ネズミの怨念だなんて、ソラセンパイどう思う？」

「怨念？」

晴空は思わず聞き返していた。言った夏夜でさえ、自分らしくない言葉が出たものだと思っている。

「おかしいな……なんで怨念だなんて……」

「でも、そう言いたくなるのも分かるよ、あんなのを見ちゃったらね」

二人の脳裏には、昨夜の墓地で見た光景がまざまざと蘇っていた。

「あの下にネズミの巣とかあるなら、早いうちになんとかした方がいいのは確かだね。ネズミは文字通りネズミ算式に増えるだろうし。それにしても建築屋の不正が、なんともゾッとしない話になったね」

「たしかに、まさかこんなことになるなんて夢にも……」

と、言いかけて夏夜は言葉を止めた。昨夜見たはずの夢のことが何故か心に引っ掛かるが、どんな夢だったかはまるで思い出せない。

「でも、当面はネズミのたたりより、綿貫建設のたたりのほうが僕達にとっては深刻かな」

「うーん」

夏夜は唸るばかりでちゃんとした返事をしなかった。晴空の言葉も耳に入らず、昨日見た夢を思い出せないことが気になってならなかった。

しかし、いくら考えても思い出せないものは思い出せない、ひとしきり唸った後に悩むのをやめた。

「ソラセンパイの言うとおりにね、まずは綿貫建設との勝負に勝たないと。あの慰霊碑のことは気になるけど……」

「それなら、ちょっと寄り道して行こうか」

晴空がそう言うと、夏夜は二つ返事で頷いた。

墓地に近づいた二人を迎えたのは、風によって運ばれてくる騒音と怒声、そして耐え難い悪臭だった。

「な、なにこれ、何が起ってるの？」

頭痛と吐き気を催すような悪臭の中で、怒れる民衆から聞いた話では、この臭いは朝から立ち込めたものだという。そして、その匂いの元を確かめに行った者が見たのは、穴の中に転がっている白骨だった。その事を知った綿貫建設は、それを口実にして墓地を破壊するとブルドーザーで乗り込み、大騒ぎになっていた。

この時はまだ、その白骨が大垣洋三のものだとは誰も思っていなかった。綿貫建設にしても、反対派にしても内心では誰かが人体模型でも持ち込んだのだろうと思っていた。ただ、夏夜たち二人だけが、言いようのない嫌な予感を覚えていた。

その予感に突き動かされるように、晴空は人垣を掻き分けて騒音を発する重機に向かって走った。

「せっかちなんだから」

夏夜は、そう言った直後反射的に鼻を押さえた。何かが腐ったかのようなこの悪臭は、僅かでも言葉を発すればそこから入り込んでくるようだった。

墓地に乗り込もうとエンジンを唸らせている何台ものブルドーザーは、その行く手を阻む人に遮られていた。

「そこをどきやがれ！」

ブルドーザーの運転席にいたガラの悪い男が怒鳴る。そしてその直後に、無意識に吸い込んでしまった悪臭に鼻を押さえた。その間、ブルドーザーは動きを止め、これ幸いとばかりに晴空は運転席に乗り込んだ。

「なんでこんなことをするのかな」

そう言った晴空もまた、入り込んできた悪臭に顔を歪めた。

「こ、この臭いの元を掘り返して処分するためだ。分かったらそこをどけ」

反射的に息を吸ってしまわないように、最初とは打って変わって勢いのない言葉だった。

「そうして欲しいのはやまやまだけど……ちょっと乱暴すぎるよね」

晴空は運転手の前で握りこぶしを作ってみせた。

「やる気か、小僧！」

運転手の恫喝を、晴空は小気味のいい笑顔で返す。猫科の動物を思わせるそれは、荒くれでならした運転手さえ怯ませた。

「人を殴ったことがないなんて思わないで欲しいな」

晴空と運転手が睨み合っている間も、墓地を取り囲んだブルドーザーはジリジリと進み、それを遮っている人は少しずつ押されていった。

綿貫建設も人身事故は起こしたくない、進路を遮っている人も怪我をしたくはない、両者の思惑が絡み合った結果ブルドーザーは少しずつ墓地の中へ入り込んでいった。

墓石を踏み蹴散らし進むブルドーザーの前に、人はなすすべもなく散らされていった。そうして前が開かれるとブルドーザーはどんどん進んでいく。

「逃げるな！ 向こうだって人殺しまではできやしない！」

誰かが叫ぶが、一度逃げに回った人たちは止められなかった。もしかすると、叫んだ者ですえすでに逃げ出していたかもしれない。

晴空が、いよいよ運転手を殴りつけようとした時、別の口から進んでいたブルドーザーが、例の穴に足を取られて転がり落ち、轟音を立てて砂煙を巻き上げた。晴空が振り返って見ると、例の慰霊碑があった穴には、巨大なブルドーザーがすっぽりとはまっている姿が見えた。そして次の瞬間、穴の周囲の地面が、まるで見えない隕石に穿たれてもしたかのように口を開け、更に多くのブルドーザーを飲み込んだ。

誰もが聞いたことのない音がした。それが、大量の砂が地面の中に落ち込む音だと気付いた時には、穴は巨大な蟻地獄のような口を開けていった。

「な、なにこれ……？」

晴空は運転手を殴ろうとした腕を引っ込め、運転手と一緒に、穴とは逆方向に駆けた。

地面に広がる大穴は、強大なブルドーザーも、厳粛に接するべき墓も、上に立つ人も全てを飲み込むべく大口を開けている。晴空を始め、虎口を逃れようとする人は、いつも踏み慣れている地面の正体が、頼りない砂粒の塊にすぎないことを思い知らされていた。

一度でも足を取られたのなら、穴の中央に向かって流れ落ちる砂によって容赦なく運ばれることになる。

幸か不幸か、大多数の人はこうなる前に逃げ出していたため、巻き込まれた人も押し合いへし合いになることなく走ることが出来た。また、ブルドーザーの乗りやすく下りやすいという構造も幸いし、逃げそこねた人というのはいないようだった。

難を逃れた晴空が背後を振り返ると、それまでであったはずの墓地が、廃墟さながらの荒地とかしているのが見えた。

「よく無事でしたね、さすがソラセンパイ」

駆け寄ってきた夏夜の顔も冷たい汗で濡れていた。

「ま、まあね……写真撮っておけばよかったかも……」

軽口を言う晴空の首にぶら下げられたカメラが揺れる。晴空は体を起こして、目の前に広がる景色を写した。

「ねえ……これってもしかしたら、あんまり良くないことなんじゃないかな……」

晴空の隣で大穴の空いた墓地を眺めている夏夜が言う。

「うん……これって、広がったってことだよな……」

晴空は、首筋から冷たい汗を流しながら、

「出口が」

と、言葉を結んだ。

それに頷くように、穴の作りがすり鉢状から次第に平坦になり、黒く染まっていった。

それが何を意味しているのか、夏夜と晴空にはよく分かった。

奴らが出てくる。

他の人はそんなことは思うよしもなかったが、この異常事態がどこまで広がるかと考えれば、この場を遠く離れたいと逃げ出すのも当然だっただろう。今この場に残されているのは夏夜と晴空の二人だけだった。

「逃げるなら今のうちじゃないかな」

晴空はシャッターを切り続け、一杯になったフィルムを取り替えていた。

「冗談でしょう」

夏夜はあらん限りの言葉で今の状況をメモしていた。

「凄くおぞましいけど、見ておきたいんだよね……」

夏夜らが落ち着くのを待っていたかのように、黒く染まっていた地面が一斉に鳴き出した。

「こ、これは……」

それはネズミの鳴き声などという可愛らしいものではなかった。地面から染み出してきたかのようなそれは次第次第に数を増し、大穴を埋め尽くしていった。

「やっぱり出口が大きいと出てくる量も多いのね」

晴空は無言でシャッターを切り続けた。夏夜はそれを見て嬉しそうに笑った。やはり晴空の手は拳を作るよりこうしている方がいい。

大量に這い出たネズミはすり鉢の底を埋め尽くしたが、すり鉢を登り切ることは容易ではなかった。先に出て力尽きた仲間の死骸を貪り乗り越え、昨日の夜に見た光景がそのまま繰り返されていった。

そして、昨日より遥かに広がった大穴はそんなネズミたちをあざ笑うかのように死骸を飲み込んでいった。地面の中に消えた分だけ湧き出てくるネズミの姿、それは果てしなく繰り返される無限地獄のような光景だった。

やがて、出てくるネズミが無くなったところでそれは終わった。この穴から抜け出すには、まだまだ数が不足していた。もっとも、ネズミにはそんなことを知る由もなかっただろう。

「なんかこういうことわざにあったよね」

「大山鳴動して鼠一匹？」

「そうそう」

一旦は納得した夏夜だが、改めて現状を見ると別の言葉が浮かんだ。

「でもこれじゃ総員玉砕せよ、よね」

それは、ことわざではなく祖父から聞いた言葉だった。

結局、あの穴から地上に身を乗り出す事の出来たネズミは一匹もなかった。人間が何をする必要もなく、ネズミたちは自ら滅んだ。

「私らとしてはこれで良かったんだけど、人間の都合で殺されたネズミの怨念がこういう結末になったとしたら、なにか複雑ものがあるわね」

「怨念か……こんなの見ちゃったら信じるしかないかな」

「私も、神社の娘として信じたくなるわよ。ジャーナリスト志望としては別だけど」

夏夜は書き終えた手帳を閉じた。

「どうするの、この事」

「当然書くに決まってるでしょ」

夏夜はキッパリと言い切った。いつの間にか、冷や汗もすっかり引いている。

「脆弱な地盤の土地にマンションを建てようとしたこと、そのために力尽くで墓地を破壊したこと。私に敵対した以上、綿貫建設に不利益な真実を片っ端から明らかにしてあげないと！」

「まだやる気なんだね」

晴空は少しも呆れた様子を見せなかった、それどころか使い終わったフィルムをカメラから出して、

「地面がへこんでいく様は逃したけど、ブルドーザーはきっちり綿貫建設の社名入りで撮影したよ」

と、言う有様だった。

「さすが頼れるっ！」

「まず何からする？」

晴空が問うと、夏夜は少し考えこんで、

「そうね、まずは、あの慰霊碑を新しく作って埋めるところから、どう？ 新聞部の立て直しと、綿貫建設との勝負はそれから！」

夏夜の提案に晴空も同意した。

「それじゃ、行こうか！」

夏夜は踵を返すなり走り出した。これをきっかけに、綿貫建設への風当たりはさらに強いものになり、倒産へと追い込まれることになる。

この場所は、三十年後もこのまま立入禁止になり、草木が勝手に生い茂り、鳥や野良猫の楽園になった。もちろん、公民館が建つことも、大量のネズミがわき出すということもなく、平和で退屈な毎日が繰り返される。なにかが起こるその日までは……

*Profile

ソリューションを書いた夢幻です。

普段はミルフィーユというサークルで・・・なんか色々やっています。

*あとがき

瑠衣と夏夜という二人の主人公が織りなす一つの物語はお楽しみいただけましたでしょうか。二人の物語はまだまだ続きますが、この話はここで幕です。

この作品で書きたかったことはザッピングです。一つの物語に二人以上の主人公がいて、それぞれが意識的・無意識的に協力しあって物語が進んでいくというゲームではお馴染み……というにも数が少ないですね。しかし、EVEバーストエラーや街など、根強いファンを持つ作品があるのも事実です。

主人公はこの人、というのが王道だというのは間違いないでしょうし、主人公の数を増やせば面白くなるなら苦労なんてありません。むしろ複数の主人公がいるほうが物語にとってはマイナスに作用する事のほうが多いでしょう。それじゃなんで書いたんだと言われると、それが書きたかったからとしか答えようがありません。

小説千幻 創刊号

<http://p.booklog.jp/book/58845>

著者：双紙屋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/soushiya/profile>

サークルメンバー・執筆希望の方はこちらから

<http://p.booklog.jp/users/soushiya/contact>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58845>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58845>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ